

国語学習資料

内容一覧

文書の書き方・読み方

- 原稿用紙の使い方
- 辞書の使い方 (1)
- 辞書の使い方 (2)
- 文章のいろいろ
- 五十音図

言葉の知識

- 外来語について——海を渡ってきた言葉——
- まちがえやすい言葉
- 慣用句のいろいろ (1)
- 慣用句のいろいろ (2)
- ことわざ (1)——生活に生きる知恵——
- ことわざ (2)——生活の中の知恵——
- 故事成語 (1)——何気なく使っている言葉にも——
- 故事成語 (2)——人生への教訓——
- 十二支のひみつ (1)
- 十二支のひみつ (2)

古文の世界

- 日本の物語文学——その発生——
- 竹取物語——日本最古の物語——
- 源氏物語
- 平家物語の武将たち
- 源平合戦地図
- 防人の歌
- 古典チェックシート

漢文の世界

- 漢文基礎知識
- 漢詩基礎知識
- 孔子——名は丘、字は仲尼——
- 李白
- 杜甫
- 孟浩然

読書のすすめ

- 読書記録をつけよう
- 芥川龍之介
- 夏目漱石
- 森鷗外

○本資料は、適宜印刷などをしてご使用ください。

○まとめて使う、一ページずつ使う、順番を入れ替えて使うなど、目的に応じてご使用ください。

○タイトルの上の空欄は、配付日や整理番号を記入するなど、適宜お使いください。

原稿用紙の使い方

わたしたちが原稿用紙に向かって文章を書く場合には、いろいろなケースが考えられますが、ここではみなさんが書いた作文を清書する場合について取り上げてみることにします。

国語の授業で原稿用紙を使用する意義としては、次のような点をあげることができます。

- (1) 一つ一つのマス目に、一字一字を正しくていねいに書くことができる。
- (2) 書かれた作文が視覚的に読みやすくなる。
- (3) 作文の分量（長さ）を正確にとらえることができる。では、原稿用紙の使い方を整理してみることにしましょう。

原稿用紙の使い方には、どうしてもこうでなければいけないといった、はつきりしたきまりはありません。ここでは、使い方の一般的な例を紹介することにします。

- 1 題名
一行めの三、四字めくらいから書く。
- 2 氏名
二行めに書く。姓と名との間を一字分あけて、氏名の下が一、二字分あくように書く。学年・組・番号は氏名の上に一字分あけて書く。

- 3 本文
三行めから、最初の一字分をあけて書き始める。
- 4 改行
改行（行をかえること）をした場合は、一字下げて（行の初めの一字分をあけて二字めから）書く。

- 改行するかぎ（「」）を使って表す場合は、なるべく改行する。改行する場合は、最初のかぎ（「」）は必ず行の一字めに書く。
- 会話文が二行以上になる場合は、次の二通りの書き方があり、どちらでもよい。

- (1) 二行めからも、一字下げて書く。
- (2) 二行めからは、一字下げないで書く。

「しめたぞ！ もつ少しのしんぼうだ。あの群れの中に一発ぶちこんで、今年こそは、目にも見せてくれるぞ。」

「しめたぞ！ もつ少しのしんぼうだ。あの群れの中に一発ぶちこんで、今年こそは、目にも見せてくれるぞ。」

- 5 特別な文字

- 「っ」「ゃ」「きゃ」「しゅ」「ちょ」の「ゃ」「ゅ」「ょ」も一字と考え、一マスの右側に小さく書く。

- 6 符号

- (1) 句点（。）や読点（、）は一マスの右上に書く。
- (2) なかぐろ（・）は、一マスの中央に書く。
- (3) 疑問符（？）や感嘆符（！）も一マスに書く。ただし、疑問符や感嘆符を使用した場合、後ろにとじかっこ（）がくる場合以外は、次の一字分をあけて文を続けるようにする。また、疑問符や感嘆符と句点や読点とが同時に使用されることはない。

例 どうしたんだ？ つう？

年 組 氏名

- (4) 次のような符号も一字扱いをして、一マスを使って書く。

「 かぎ かぎかっこ
『 』 二重かぎ
（ ） かっこ まるがっこ パーレン
ハイツ
ダブルハイフン
Ⅱ
やまがた ギュメ
《 》 二重やまがた ダブルギュメ
「 」 かくがっこ ブラケット
「 」 そでがっこ キツコー
【 】 すみつきパーレン

- (5) ダッシュ（—）やリーダー（……）は、二字扱いにし、二マスを使って書く。

- (6) くり返し符号（々）は一字扱いにし、一マスの中央に書く。

ただし、行頭に「々」は書かない。そのような場合には、くり返し符号を使用しないで、前の行のいちばん下にある文字と同じ文字をもう一度書くようにする。（固有名詞は例外）

- 1 句点と「ゃ」「ゅ」「ょ」などが続いた場合には、一マスの中にいっしょに書く。

- 2 行頭には、句読点や次のような符号は書かない。

例 。 、 ・ ・ ・

行頭にくる場合は、前の行のいちばん下にある文字と同じマスの中に書き入れる。

極端な例であれば、次のようなことも起こりうる。

例 ある。

- 7 数字

縦書きの場合は、漢数字を使用することが原則である。

▼作文の清書例

マンションの水
一年五組三十番 高橋 真実
おとこの夕方、外から帰ったら、お母さんが、
「おふろの水があふれているのよ。真実ちゃん、
でしよ。」
と、ふろ場から大声で言いました。わたしは
「うがうわ。大なんかに出さなかったわよ。」
と言いなから、ふろ場に行ってみました。お
母さんと二人で調べてみたら、蛇口のところが

辞書の使い方 (1)

年 組 氏 名

【日本の辞書の歴史】

みなさんは、日本には辞書がいつごろからあるか知っていますか。現在、残っている辞書の中でいちばん古いものは、あの有名な弘法大師こと、空海がつくったとされる、『篆隷万象名義』といわれるもので、平安時代の初め、八三〇年以後につくられたとされています。でも、もっと古い辞書もあったのです。それは、『新字』という辞書で、全部で四十四巻にもなる大きなものです。この『新字』は、六八三年に成立したとされていますが、六八三年といえは、まだ飛鳥時代のこと。はたしてどんなことが書いてあったのでしょうか。興味あるところですが、残念ながら、この『新字』は、現在、残っていないため、その内容は不明です。

『新字』から遅れること、約二五〇年。日本で最初の百科事典ともいえるべき『和名類聚抄』(和名抄)が、源順という人によってつくられました。この『和名類聚抄』は、日本や中国の多くの書物から、実にたくさんものの名を集め、それを分類して並べたもので、全部で二十巻にもなる大きな事典です。

源順は、さぞかし苦労してつくったことでしょう。

さて、時代は下って、安土・桃山時代から江戸時代。この時代、多くの宣教師(キリスト教の教えを説く人)たちが、キリスト教を広めるために日本にやってきました。彼ら宣教師たちは、日本語を理解するために多くの辞書を作りました。これらの辞書には、ローマ字を使っているのに、とても貴重な資料になります。有名なものに、『日葡辞書』(日本語・ポルトガル語 一六〇三年)があります。



【漢和辞典 引き方のポイント】

国語辞典はよく使うけれど、漢和辞典はあんまり……という人、いませんか。

漢和辞典を引くと、漢字の読み方、意味、使い方だけでなく、その漢字の成り立ちや筆順、画数、部首などもわかります。

ぜひ活用しましょう。

★読みがわかれば「音訓索引」!

音訓索引には、読み方の五十音順に、漢字の掲載ページが出ています。ふつう、音はカタカナ、訓はひらがなで示されています。

例えは「テイ」と読む漢字はいっぱいあるけれど「にわ」と読む漢字は少ないよね。だから、「庭」という漢字は音で引くより訓で引くほうが速いんだ。訓がわかっているときには音より訓がおすすめです。

★部首がわかれば「部首索引」!

1 部首の画数を数える。

2 部首索引でその画数のところを探し、その部首の出ているページを見つける。

3 そのページを開く。その部首の漢字が、部首を除いた部分の画数ごとに並んでいる。

4 部首を除いた部分の画数を数え、その画数のところを探す。

……たいていの部首は、その始まりのページに部首の名前が書いてあるから、ついでに覚えるようにしよう。

★読みも部首もわからなかったら「総画索引」!

見たことのない漢字が! そんなときは漢字の画数を調べ、総画索引で引こう。

……画数の数えまちがいに注意。

「郷」は何画? 「延」は? 「発」は?

実践 こんなときは、この辞書をつかえ?

[例文1]

軽井沢に冬が来ると、野鳥たちの天国になります。
① ぼくのペンションのまわりにも、いろんな野鳥や、
② 野生の動物たちが遊びに来てくれます。だから、
朝は、だれよりも早く起き出して、熱いコーヒーを片手に、野鳥たちの姿を眺めます。野鳥たちは、
ひねもす鳴き続けてくれます。また、夜は、スコ
③ ッチを片手にしながら狸や狐やテンなどの姿を見
④ ることができます。
⑤ ⑥

- ① 「軽井沢」ってどこ? ⇒ 「地名辞典」
- ② 「ペンション」ってなに? ⇒ 「現代語辞典」
- ③ 「ひねもす」の意味は? ⇒ 「国語辞典」
- ④ 「スコッチ」ってなに? ⇒ 「外来語辞典」
- ⑤ 「狸」はどう読むんだろう。⇒ 「漢和辞典」
- ⑥ 「テン」ってどんな動物? ⇒ 「百科事典」

[例文2]

どういうわけか、とんびはくると輪を描くことになっている。しかも、夕焼け空が似合うのだ。とんびはタカの仲間でありながら、昔から「とんびが鷹を生む」とか「とんびに油揚げをさ① らわれる」とかいわれて、あまりよいイメージをもたれていない。でも、とんびは、イヌワシやクマタカ② と同じ、れっきとしたワシタカ科の鳥なのだ。ワシタカ科の鳥は、ふつうスピード感あふれるハン③ ティング④ をすることが知られている。しかし、と⑤ んびはハンティングが苦手だ。……

- ①・② この慣用句の意味は? ⇒ 「慣用句辞典」
- ③・④ どんな動物かな? ⇒ 「動物事典」
- ⑤ 「ハンティング」の意味は? ⇒ 「外来語辞典」

辞書の使い方(2)

年 組 氏名

国語辞典を上手に使いこなすためには、その辞典の形式に親しみ、いろいろな約束を理解しておくことが必要です。

どんな辞典でも、はじめのほうに「この辞典の使い方」あるいは「凡例」などとして、その辞典の使い方や約束ごとが説明されていますので、必ず目をおしませよう。「こんなことまでわかるのか」とそれまで知らなかった辞典の使い方を発見することまちがいないしです。

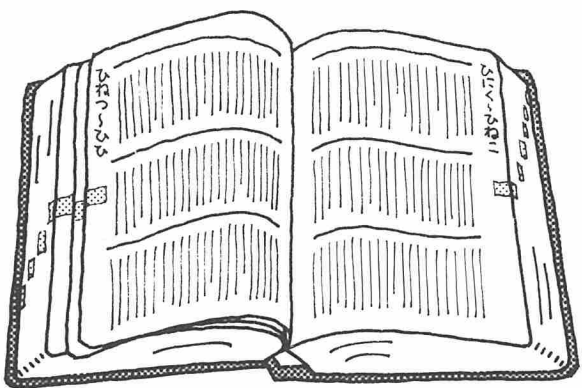
一 言葉の探し方

1 基本は五十音順だ！

「見出し」(目印)を利用せよ！

ページのいちばん外側(小口)に付けられている「小口見出し」で、調べる言葉の場所の見当をつけよう。

そのあとは、ページの「上」もしくは「横」に示されている「柱見出し」を活用しよう。「柱見出し」には、そのページの初めの言葉と終わりの言葉の、初めの二・三文字を表してある。例えば「ひにく」「ひねこ」のページなら「ひねもす」は載っていないことがわかるんだ。



2 見出し語(項目)の並べ方の原則

(1) 清音・濁音・半濁音の順番で並んでいる。

はらはら↓ばらばら↓ぱらぱら

(2) 拗音の「や・ゆ・よ」「つ」や促音の「っ」は、ふつうの「や・ゆ・よ」「つ」のあとに並んでいる。

きよう(器用)↓きよう(今日)

はつか(二十日)↓はつか(発火)

(3) 長音をふくむ言葉は、その上の母音をくり返した形におきかえて探せ！

オートバイ↓おとばい

コーヒー↓こおひい

*のばした音は考えない、という原則の辞典もある。
オートバイ↓おとばい
コーヒー↓こひ

3 見出し語が見つからない

「あきらめるのは早い! 言い切りの形で探せ!」

「読んだ」という語を調べたくても、このままでは調べられないね。「美しかった」も見出し語になってないからだめだ。このように形の変わる語(活用のある語)は、言い切りの形に直してから探そう。

「読んだ」↓「読ん+だ」↓「読む」
「美しかった」↓「美しかった+た」↓「美しい」

4 見出し語が見つからない

「あきらめるのは早い! もとの語を考えよう!」

「新しさ」という語を調べてみると、見出し語に見つからない場合がほとんどだ。しかし、これもまたきちんとした探し方を知っていれば見つかるんだ。

「新しさ」のもととなった語はなんだろう。そう、「新しい」という語だ。そこで、もとの形の語「新しい」を引いてみると……

あたらしい【新しい】(形) ①今までにはなかった……

——がる(自五)——げ(形動)——さ(名)

5 見出し語が見つからない

「あきらめるのは早い! 「親項目」で探せ!」

「息が切れる」はどうすれば調べられるだろう。こういう場合は、「息」という見出し語を調べてみよう。すると「息」という語の解説に続いて、次のように書かれていないかな。

いき【息】①(動物が)口や鼻から呼吸する。②(植物が)土から呼吸する。③(人が)呼吸する。④(風が)吹く。⑤(水が)流れる。⑥(火が)燃える。⑦(煙が)出る。⑧(汗が)かく。⑨(涙が)流れる。⑩(血が)流れる。⑪(汗が)かく。⑫(涙が)流れる。⑬(血が)流れる。⑭(汗が)かく。⑮(涙が)流れる。⑯(血が)流れる。⑰(汗が)かく。⑱(涙が)流れる。⑲(血が)流れる。⑳(汗が)かく。㉑(涙が)流れる。㉒(血が)流れる。㉓(汗が)かく。㉔(涙が)流れる。㉕(血が)流れる。㉖(汗が)かく。㉗(涙が)流れる。㉘(血が)流れる。㉙(汗が)かく。㉚(涙が)流れる。㉛(血が)流れる。㉜(汗が)かく。㉝(涙が)流れる。㉞(血が)流れる。㉟(汗が)かく。㊱(涙が)流れる。㊲(血が)流れる。㊳(汗が)かく。㊴(涙が)流れる。㊵(血が)流れる。㊶(汗が)かく。㊷(涙が)流れる。㊸(血が)流れる。㊹(汗が)かく。㊺(涙が)流れる。㊻(血が)流れる。㊼(汗が)かく。㊽(涙が)流れる。㊾(血が)流れる。㊿(汗が)かく。

見出し語にないからといって、すぐにあきらめてはだめだね。

二 国語辞典のこんな使い方

みなさんが国語辞典を使うときは、どんなときでしょう。その代表的な使われ方を整理してみると、次の三通りになります。

①言葉の意味がわからないとき

②言葉の使われ方を調べたいとき

③言葉を漢字でどう書き表すか確かめたいとき
ところが国語辞典は、こうした使われ方だけでなく、さまざまな場面で活用されるように工夫されているのです。

1 漢字学習に役立つ!

見出し語を漢字で書いた場合、それが「教育漢字(小学校で習う漢字)」か、「常用漢字(中学校までに習う漢字)」か、それ以外なのかを示しています。

2 アクセントがわかる!

辞典によって、表記の仕方は異なりますが、共通語のアクセントを示した辞典が増えています。

あめ【雨】アメ
あめ【飴】アメ

3 「付録」も充実しているぞ!

国語辞典の巻末には、それぞれ工夫された付録がある。国語の知識のみならず、生活百科・地理・歴史にかかわるものなどさまざま。一見の価値あり!

わたしたちのまわりには、さまざまな種類の文章がある。そして、それらは目的に応じて、一つのスタイルをもっている。なぜ、そういう書き方をしているのか、どう読み取ったらいのか、こういう場合にはどのような書き方をしたらよいのか、などを考えながら、身近にある文章を見つめ直してみよう。

〔説明―薬品の効能書き〕

現代の生活環境の複雑化に起因するストレス・精神的疲労・不安などによって生じる胃痛・胃酸過多・さらに飲み過ぎや食べ過ぎによる胃腸の不調・不快感・機能の衰えなどが起こりがちです。
ユチーフ錠は、こうした胃腸の症状の改善に役立つメチルメチオニンスルホンウムクロライド（胃壁の栄養代謝を改善します）、ガストリックチムン（胃粘膜の表面を保護します）―中略―
ユチーフ錠はまず外層成分が過剰の胃酸を中和し自律神経の緊張を和らげ、ついで内層成分が胃腸の防御力を高めるように工夫された胃腸疾患治療剤です。

※ もの・ことの状態や仕組み、はたらきなどをわかりやすく、筋を通して書いた文章。

〔宣言〕

平塚らいてう（らいちょう）の「青鞥」創刊号
発刊の辞

元始、女性は実に太陽であつた。真正の人であつた。
今、女性は月である。他に依つて生き、他の光によつて輝く、病人のやうな蒼白い顔の月である。
偕てここに「青鞥」は初声を上げた。
現代の日本の女性の頭脳と手によつて始めて出来た「青鞥」は初声を上げた。 ―後略―

※ 社会的なできごとに対して、自分の立場を明らかにするために、意見をはっきり表した文章。

〔記録―ノンフィクション文学〕

関千枝子『広島第二県女二年西組』序章より
八時すぎというのに太陽は暑かった。一軒のひき倒された家の屋根の上から道はじに向かって、広島第二県女（広島県立第二高等女学校）二年西組の生徒たちが一列に並んでいた。引率教師の波多やエ子、高橋律子がひきはがした瓦を生徒に渡す。生徒たちはそれをリレー式に手渡し、最後の一人は、道端にきれいに積み上げる。「ハイ」「ハイ」かけ声をかけながら瓦はみる間に積み上げられて行った。昭和二十年八月六日、広島市雑魚場町（現・国泰寺町）。市役所裏―とよばれるこの一帯で、あちらでもこちらでもこうした瓦運びをしている集団があった。
―後略―

※ 人のしたことや事件などの真実を、時間の経過にそって書いた文章。

〔解説―用語解説〕

ナショナルトラスト
広範な国民から寄せられる資金によって地方公共団体、民間団体が良好な自然環境を持つ土地の取得、管理を行い、その環境を守っていこうというもの。
国民環境基金ともいう。
北海道・知床半島の自然を守ろう、という知床百平方メートル運動では約四〇〇ヘクタールあまりの土地を確保した。民間での動きとしては和歌山県田辺市の天神崎での運動を展開した「天神崎の自然を大切にする会」が第一号。第二号として北海道小清水町の「小清水自然と語る会」が一九八九年に認定された。この運動に対しては八五年度に設けられた税制上の優遇処置があり、認定された団体への寄付はその寄付金額に応じて所得税、法人税の対象が軽減されるもの。

※ ある事柄や現象などについて、多くの人々に共通理解を与えるための文章。

〔報道―新聞記事〕

あす開幕 ―ワ条約京都会議―
絶滅の恐れのある野生動植物の国際取引を規制するワシントン条約の第八回締約国会議が二日、京都市の国立京都国際会館で開幕する。百六カ国から政府代表や自然保護団体のメンバーら約千人が参加する会議は十三日までの日程で開かれ、アフリカゾウやクロマダグロ、熱帯木材などの取引規制に関する百二十五の規制案が審議される。また、アフリカ南部諸国からは、条約の規制基準を原産国に有利となる新基準に改めるよう求めた決議案なども提案される。

※ 不特定多数に、社会性のある事件を客観的に伝える文章。5W1H（いつ・どこで・だれが・なにを・なぜ・どのように）が必要とされる。

〔広告―求人広告〕

運転手・庶務募集
・職種／乗用車運転及び庶務
・場所／東京本部（大手町）及び都内・埼玉・神奈川・千葉県内の各支店
・勤務／原則 8 時 45 分～17 時
週初・月末は 17 時 40 分
・休日／土曜・日曜・祝日
・資格／43 歳～53 歳（高校卒業程度）要普通免許
・待遇／当社規定により優遇
・応募／履歴書（写真貼付）を 3 月 31 日（消印）迄に左記宛郵送下さい。書類選考の上面接日等詳細は追って通知します。
―以下、略―

※ 限られたスペースに必要なことを盛り込み、仕事の内容や待遇などを知らせようとする文章。

五十音図

年 組 氏名

五十音図

同じ母音の仮名を、横に十行、同じ子音の仮名を縦に五段並べたもの。縦の列を行（ア行・カ行など）、横の列を段（ア段・カ段など）と呼ぶ。文字数は「いろは」と同じ四十七字である。本来は、片仮名で表すのが一般的だったが、現在では平仮名で表すことが多い。末尾の「ン」は、もとはなかったが、後世になつて付け加えられるようになった。

＜母音とは＞

のどを通して出てきた声で、舌や唇などでまきつなどを受けて発音されるもの。基本的には、a・i・u・e・oの五音。

＜子音とは＞

のどを通して出てきた声で、口の中で閉じられたりせめられたりして発音されるもの。k・s・n・g・zなどがある。

＜片仮名＞

ア段
イ段
ウ段
エ段
オ段

	ワ行	ラ行	ヤ行	マ行	ハ行	ナ行	タ行	サ行	カ行	ア行
ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
	イ	リ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
	ウ	ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
	エ	レ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ

＜ローマ字＞

	子音	母音	子音	母音	子音	母音	子音	母音	子音	母音	子音	母音	子音	母音	子音	母音	子音	母音	母音								
n	w	a	r	a	y	a	m	a	h	a	n	a	t	a	s	a	k	a	a								
	i		r	i		i		m	i		h	i		n	i		t	i		s	i		k	i		i	
	u		r	u		y	u		m	u		h	u		n	u		t	u		s	u		k	u		u
	e		r	e		e		m	e		h	e		n	e		t	e		s	e		k	e		e	
	o		r	o		y	o		m	o		h	o		n	o		t	o		s	o		k	o		o

五十音図の歴史

いつ、だが、なんのために作ったのか、詳しいことはわからない。平安時代初期に、漢字の音や、お経に使われる古代インド語を学ぶ僧たちが、日本語の音を組織的に配列したのがはじまりだという説もある。今残っている最も古いものは「孔雀経音義」（一〇四〇〜二八〇年ごろ成立、醍醐寺蔵）という、お経に出てくる語句の発音や意味について述べた本の巻末にのっているものだが、ア行とナ行が欠けている。十行分そろつたものでは、金光明最勝王経音義（一〇七九年）にのっているものが最も古い。

※ 「五十音図」というけれど、五十の文字があるわけでもなく、五十の音があるわけでもない。母音と子音という観点から、仮名を五段・十行に整理した図（今なら表といふべきもの）だから、「五十音図」というのだ。現在の「五十音図」では、文字は「45＋ン」、音は「44＋ン」ということになる。

☆失われたワ行の音

ワ行の「ヰ」・「ヱ」・「ヲ」は、もともとア行の「イ」・「エ」・「オ」とは発音が違っていた。現在ではそれらの音は失われたとされ、「イ」・「エ」・「オ」で表される。ただし、「ヲ」は、「……を」という助詞のかたちで残っている。

☆便利な五十音順

何かを順番に並べる時、五十音を使うと便利である。出席簿、国語辞典、百科事典、電話帳、図書目録など、いろいろなところで使われている。日本語でアイウエオ順が使われるように、英語ではA B Cの順序が使われている。英語の辞書を確認してみよう。



外来語について

―海を渡ってきた言葉―

年 組 氏名

◇「外来語」はいくつくらいあるか？

現在出版されている大型の外来語辞典を例にとると、収録されている語の数は三二、〇〇〇で、その中から固有名詞や略語などを除いて考えると、収められている一般的な外来語はおよそ三〇、〇〇〇語程度になります。また、定評のある小型の外来語辞典には、約二〇、〇〇〇語ほどの一般的な外来語が収録されています。さらに、平成二（一九九〇）年に新しく出版された外来語辞典にも、人名や地名などを除いて約二〇、〇〇〇語が収録されていますから、一般に認められている外来語は、ひとまず二〇、〇〇〇から三〇、〇〇〇語程度だと考えてよさそうです。

次に、実際にどれくらいの割合で外来語が使われているのかをみてみることにします。

昭和三一（一九五六）年の調査によれば、九〇種類の雑誌に使われていた外来語の数は、全体の語の約一割に近かったということですし、昭和四一（一九六六）年に行われた、新聞に使用された外来語に関する調査では、およそ一パーセントが外来語であったという結果が出ていたということです。

話し言葉の場合についても、昭和五五（一九八〇）年に報告された、ある人々の四一時間分の会話を分析した調査によれば、使用された外来語の数は全体の約一〇パーセントであったということがわかっています。全体では五、三四一語が使われているということです。から、用いられた外来語はおよそ五三〇語程度と考えられます。こうした資料をもとに考えると、書き言葉の場合も、話し言葉の場合も、使用する語のおよそ一〇パーセントが外来語だといえそうです。しかし、時代の移り変わりのなかで、外来語が使われる割合はどんどん高くなっているような印象を受けるのは事実で、今後ますます日本語の中に外来語が重要な位置をしめていくのはまちがいません。

では、どのような国から渡ってきた外来語が多いのでしょうか。

昭和五五（一九八〇）年ごろの調査によれば、ある国語辞典の中の外来語（約三、四〇〇語）のうちでもっとも多かったのが、英語から取り入れられたもので、全体のおよそ八〇％をしめていたそうです。以下、ドイツ語とフランス語がそれぞれ五、六％、オランダ語が二％、イタリア語とポルトガル語が一、一・五％程度だということです。

▼外来語の身元を調べよう▲

○「駅の売店」「キオスク」 ペルシャ語の「宮殿」を意味する言葉が「あずまや」の意味でトルコ語に取り入れられて、広くヨーロッパに広まり、日本には英語「kiosk」を経て伝わってきた。

○「鍋料理に欠かせない」「ボン酢」 オランダ語から入ってきた「ポンス」がなまって「ボンズ」となっていて一般化したものといわれる。ガス、コップ、ランドセルなどもオランダ語からの輸入品。

○「天婦羅」「釦」「煙草」は何と読む 「テンプラ」「ボタン」「タバコ」と読む。ポルトガル語から入ってきた言葉だが漢字を当てて使われてきた。

○お店の「暖簾」 中国語から入ってきた言葉。中国語では、同じ字を書いて「ノアンリエン」と読む。

◇「外来語」はいつごろから日本に渡ってきたか？

「外来語」とは、ふつう室町時代以降に外国語から日本語の中に入ってきた言葉のことをさしていると考えられています。外国の文化を取り入れるのといっしょに、その国の言葉が日本語の中に取り入れられてきたのでした。室町時代から江戸時代の初めのころは、ポルトガルやスペインからいろいろなものもたらされました。キリスト教の宣教師たちが伝えた言葉が多いのもこのころの特徴です。

「ポルトガル語から」

オルガン	カルタ	サボテン	バスケット
チョッキ	パン	クリシタン	クリスト

「スペイン語から」

ボレロ	カナリア	トマト	タンゴ
-----	------	-----	-----

（※オランダ語と区別のつかないものが多い）

次に伝わってきたのがオランダ語です。鎖国政策をとっていた江戸時代も、長崎の出島だけは海外への門戸として開かれていました、オランダとの貿易を通して、医学や化学、薬品関係の言葉が多く輸入されています。

「オランダ語から」

アルコール	インキ	ガラス	ゴム
ドロップ	ピストル	フォーク	コンパス

江戸時代の終わりになると日本ではフランス式の兵学を学んだ関係でフランス語が入ってきます。また、明治になると、ドイツやイタリアからもそれぞれの文化とともに多くの言葉が入ってきました。フランス語からは、芸術や服飾、料理関係の言葉、ドイツ語からは哲学や医学関係の言葉、イタリア語からは音楽関係の言葉が多く入ってきています。

「フランス語から」

アトリエ	クレヨン	デッサン	クロツケ
クーデター	アンケート	ポタージュ	アベック

「ドイツ語から」

アルバイト	イデオロギー	カプセル
ゼミナール	ノイローゼ	ヒステリー

「イタリア語から」

アルト	アレグロ	オペラ	デュエット
クラリネット	コンチェルト	スパゲティ	

英語からの影響については、日本の英語教育が大きな役割を果たしてきました。英語が広く一般に広まるのにもなつて、英語を使う国々からの文化が急速に取り入れられてきたことはいまでもありません。

これが「のれん」となった。

○「オートバイ」は日本製 英語では「motor-bike（モーターバイク）」「autocycle（オートサイクル）」で「オートバイ」とはいわない。「ガソリンスタンド」「ゴールイン」「テレビタレント」などもみんな日本製。

これらは、和製英語や和製洋語と呼ばれている言葉の仲間。

○「エアコン」は省略形 「エア・コンディショナー（air conditioner）」から一部分だけをとってできた不思議な外来語。マスコミも「マス・コミュニケーション」からできた言葉だが、こちらの方は「口（くち）」とくっついて「口コミ」などとも使われているから、ますます不思議。

ふだんなにげなく使っている言葉の中に、もともとの意味を知らないためにまちがって使っていたり、言葉の意味をかんちがいして使っていたりするものがありませんか。

語源や正しい使い方について調べてみましょう。

りんごを買いに出かけた陽子さんが店の前まで行く
と、産地直送のりんごの試食会をやっていた。りんご
を食べて感想を言ったら、おみやげにりんごを五つも
もらった。恵子さんは思わず、「ラッキー！ 犬も歩け
ば棒にあたるね。」と言った。

この話を聞いた鉄男君、
自分もりんごをもらおうと
出かけたが、途中で雨が
降ってきて、走ったらころ
んでしまった。くじいた足
を引きずりながら鉄男君は
「ああ、犬も歩けば棒にあ
たるだな。」とつぶやいた。



「犬も歩けば棒にあたる」ということわざは、陽子さんと鉄男君と、どちらが正しい使い方をしているでしょう。今ではほとんどの人が、恵子さんのように「ラッキー」といった気持ちを表すときに使っているのではないのでしょうか。鉄男君のように「災いにある」という意味で使う人は、あまりいないようです。

しかし、このことわざは、もともと「ものごとをしようとする者は、思わぬ不運や災難にあうことのとえ」でした。それが転じて「幸運にあう」意味でも使われるようになったのです。陽子さんの使い方もまちがいではないのですが、鉄男君のほうが正しい使い方をしているのです。

では、次のことわざはどうでしょう。



重い荷物を持って階段を上がつていく桜田君を見かけた弓子さんと春絵さん。二人とも同時に（手伝ってあげようかしら）と思った。しかし、そのあと二人の考えたことは全く正反対だった。

弓子さん： 情けは人のためならずだから、手伝うのはやめよう。

春絵さん： 情けは人のためならずだから、手伝ってあげよう。

弓子さんは「同情して手伝うのは桜田君のためにならない。だから手伝うのはやめよう。」と考え、春絵さんは「同情して手伝うということは、いつかは自分もそうしてもらうことがあるということだ。めぐりめぐって、自分のためになることもあるので、手伝ってあげよう。」と考えたのです。

さて、「情けは人のためならず」は、どちらの使い方が正しいのでしょうか。調べてみましょう。

まちがって使われている言葉はことわざだけではありません。例えば、次のような言葉の場合はどうでしょう。

「あの人は何を考えているのかよくわからない。気がおけない人だ。」

「あの人はもう十年も前からの知り合いなので、気がおけない人だ。」

「気がおけない」を、「安心できない」とするか「遠慮がない」とするかで、使い方は正反対になります。この場合、「気」は、「気をつかう」とか「気にとめる」「気をまわす」とかの「気」で、「ものごとをうまく運ぶためにつかう心」のことです。「気がおけない」は、そういう配慮をする必要がない間がらを表すときに使う言葉で、「安心できない」という意味で使うとまちがいになります。

次の言葉も、まちがって使われやすいものの一つです。

「健次君、今度生徒会の会長になったんだってね。おめでとう。第一中学校のために、君の活躍を期待しているよ。」

「ありがとう」ございます。生徒会の会長なんて、ぼくは役不足なんです。第一中学校の生徒会のために精いっぱい努力したいと考えています。」

この例で、まちがって使われている言葉は「役不足」です。健次君は、自分の実力が十分ではないと謙そんして言ったつもりなのですが、これでは、聞いた相手は驚いてしまいます。なぜなら「役不足」というのは、「与えられた役目が、自分の能力よりはるかに軽い」と感じられたときに、不満な思いをこめて使う言葉だからです。だからこの場合、健次君は「生徒会長なんか、ぼくの能力からみれば軽いものさ。」と言ったことになってしまいます。

言葉づかいの専門家であるアナウンサーも、時にはまちがった言葉づかいをすることがあります。

《マラソンの実況中継で》

山田、快調な走りです。あ、前に行く田中を抜きました。田中の前には中山がいます。あ、中山も抜きます。山田、速い。山本も抜きました。本田も抜かれます。すごいです。田村も、村山も抜いていきます。なんと、山田、ここまでで六人抜いています。ごぼう抜きです。

「ごぼう抜き」のまちがった使い方です。正しい使い方を調べてみましょう。

ほかにも、まちがった使い方をしやすい言葉として、

「一姫二太郎」

「小春日和」

「早生まれ」

などがあります。また、「一所懸命」を「一生懸命」と書き、今ではどちらも使われるようになったものもあります。「ぬれ手にあわ」なども誤解しやすいので気をつけましょう。

顔 顔がきく
顔がたつ
顔がひろい
顔にどろをぬる
面の皮があつい

耳 耳がはやい
耳にいれる
耳をうたがう
きき耳をたてる
寝耳に水

目 目がさめる
目がたかい
目がとび出る
目にあまる
目をとおす
大目にみる

肩 肩で息をする
肩の荷がおりの
肩身がせまい
肩をならべる
肩をもつ

こし腰 腰がおもい
腰がつよい
腰がひくい
腰をぬかす
本腰をいれる

足 足がおもい
足がでる
足が棒になる
足をはこぶ
足をひっぱる

頭 頭うちになる
頭があがらぬ
頭がいたい
頭にくる
頭をひねる

鼻 鼻がきく
鼻でわらう
鼻にかける
鼻につく
鼻をあかす

歯 歯がうく
歯がたたない
歯がゆい
歯に衣きせぬ
歯をくいしばる

口 口がうまい
口がかたい
口がかるい
口車にのせる
口をすべらせる

手 手があく
手がまわらない
手におえない
手につかない
手をひく
手をやく

骨 骨がおれる
骨ぬきにされる
骨身にこたえる
骨をうずめる
骨をおしむ

腹 腹が大きい
腹が黒い
腹がたつ
腹にすえかねる
腹をさぐる

住居に関する慣用句

うだつがあがらない 「うだつ」ははりの上に立てる小柱。これがあがなければ家の屋根もあがらず、家が建たない。そこから、運が開けないこと、芽が出ないこと、不幸せのことをいう。

棚に上げる 家の中の棚にしまいこんで取りあげないことから、かざりものにして問題にしない、知らんふりをするなどの意で使われる。

板ばさみになる 両方から責められて、どちらにもつけず思い悩むこと。

ぬかにくぎ いくらやっても効きめがないこと。

衣服に関する慣用句

左前になる 仕事がかうまくいかず、経済的に苦しくなること。
そでの下 わいろのこと。
人にわいろをわたすときに、他の人に見えないようにそでの下にかくしてわたしたところから。
たもとを別つ 別れることを指す。
えりを正す いいかげんな態度を改め、気持ちを引きしめること。

飲食物に関する慣用句

味をしめる 一度飲食をして、その味が忘れられないところから、何事にもよらず一度やってみて利益や成功をおさめて、その快感が忘れられないこと。
塩梅をみる 飲食物を調理する塩や梅酢の加減。体のぐあいや健康に用いるようになった。
にても焼いてもくえない どうにもこうにも手に負えない人などにいう。
ごぼうぬきにする ごぼうが、たいていまっすぐにのびて、大根やニンジンとくらべて、土を掘らなくても簡単にぬけることから、強引に人を引きぬくことをいう。
水を差す 人の仲のよいところに、みずを加えてうすめるところから、仲たがいさせることをいう。
みそをつける 調理の場合に、いろいろな方法でやってみて、だめな場合に最後にみそをつけて、とりつくろうことから、不手際・失敗の意。

体に関する慣用句

動物に関する慣用句

犬
犬の遠ぼえ
犬も食わない
ねこ
ねこに小判
ねこの手も借りた
ねこの額
ねこも杓子も
ねこをかぶる
馬
馬があう
馬があらう

生き馬の目をぬく
しり馬にのる
馬脚をあらわす
鳥
鳥はだがたつ
飛ぶ鳥をおとす
うのみにする
おうむ返し
からすの行水
すずめの涙
鶴の一声

魚
うなぎのぼり
うなぎの寝どこ
さばをよむ
とどのつまり
虫
虫がいい
虫のいどころが悪い
ありのはい出るすきもない
あぶはちとらず
蚊の鳴くような声

芝居に関する慣用句

芝居をうつ
ひのき舞台に出る
のべつ幕なし
幕がおりる
幕があがる
脚光をあびる
板につく
役者がそろう
出る幕ではない
二の舞を演じる
見栄を切る

自然に関する慣用句

あとは野となれ山となれ
雲泥の差
風上におけない
かみなりが落ちる
草木もなびく
草の根分けても
雲行きがあやしい
彗星のごとく
台風の目
月とすっぽん
雲をつかむよう
どこ吹く風
波風をたてる
波にのる
薄氷をふむ
光を放つ
火がつく
火花を散らす
ほのおを燃やす
氷山の一角
風雪にたえる
水に流す
水のあわになる
水をさす
山があたる
山場をむかえる
山をはる

江戸に関する慣用句

勝つてはまたまた
太刀打ちしない
かまふやうな
しのめやうな
つばきつな
江戸直入
外へ出る
不意に
立ち往生
名乗る
のりこ
普水の陣

いふわい(一)
——生活に生かす知恵——

年 組 氏 名

「ことわざ」には、昔の人の知恵がいっぱいつまっています。その中から、まず、天候や気象に関係のあるものを紹介してみることしましょう。

次に、毎日の天気をうらなううえで参考となる「ことわざ」をあげてみます。
同じ「夕焼け」でも季節によって違いがあります。

暑さ寒さも彼岸(ひがん)まで

夏の暑さが残っているといっても秋の彼岸のころまでで、そのころを過ぎると涼しくなって過ごしやすくなるし、冬の寒さが残っているといっても春の彼岸のころを過ぎると暖かくなって過ごしやすくなるものだという意味。
いずれにしても、彼岸が季節の変わり目で、そのころを過ぎると気候がちやうど過ごしやすくなってくるといふこと。

冬至(とうじ)から畳の目ほど日が延びる

『冬至から畳の目一つだけ日が長くなる』

冬至とは、一年で昼間の長さがもっとも短い日のこと。ふつう、十二月二二、三日のころ。
冬至を過ぎると、少しずつ、少しずつ日が長くなるといふこと。

※「三寒四温」というように、冬から春にかけての季節のうつろいは、寒い日が三日続くと暖かい日が四日続く、というふうに寒い日と暖かい日とがかわるがわるやってきて、やっと春になるといふ。

秋の日は釣瓶(つるべ)落とし

釣瓶は、井戸の水をくみ上げるために、縄やさおを付けたおけ。釣瓶落として、急速に落ちることをいふ。

秋の日は、水をくむときの釣瓶が落ちるように急速に暮れるといふこと。

春の晩飯あと三里

春は日が長いので、夕食を終えてからでも、暗くなる前にまだ三里くらい歩くことができるということ。

▼知っておきたいことわざ集1▲

○案ずるより産むが易(やす)い

(物事は、はじめ心配するよりも実行してみると案外たやすくできるものだというたとえ。)

○石のうえにも三年

(いくらつらく苦しくても、しんぼうすればきっと報われるものだという教え。)

○氏(うじ)より育ち

(人間にとって大切なのは、その人の血筋や家柄ではなく、育った環境やその人自身の努力だという教え。)

秋の夕焼けに鎌(かま)を研(と)げ、夏の夕焼けに川を渡れ

秋の夕焼けは翌日がいい天気になる印だから、農作業をするための準備をしろ、夏の夕焼けは次の日が雨となるから、早く川を渡ってしまえ、ということ。

※似たような例では、こんなものもあります。

○春の夕焼けは蓑(みの)と笠(かさ)

(翌日が雨になるから、雨具の準備をしたほうがよい。)

○夏の夕焼け雨が降る

○夏の夕焼け田の水落とせ

(大雨になるおそれがあるから、田の水があふれないように気をつけておく必要がある。)

その日の天気を知るうえで、朝の状態が大きな意味をもつようです。

冬の霞(かすみ)はこうすき持つてこい

「こうすき」は、雪かき用の道具。朝の霞がはれるとふつうはよい天気になるのだが、冬にはかえって大雪になることがあるから雪かきの道具を準備したほうがよいということ。

朝焼けは雨、夕焼けは晴れ

朝、東の空が赤く染まっているのは、その日雨が降る前触れで、夕方、西の空が赤く染まるのは、翌日がいい天気になるしるしだということ。

※「夕焼け」のときと同じように、季節が春だと反対に、

○春の朝焼けは日照り

(ふつう朝焼けは雨の前ぶれだが、春はいい天気になる。)

○情けは人のためならず

(人に情けをかけておけば、いつかは必ず自分のためになるという教え。)

○帯(おび)に短したすきに長し

(何かに使おうにも中途半端で使いものにならないことのたとえ。)

○果報(かほう)は寝て待て

(果報はしあわせ。幸運はあせらずにじっと待っているのがよいという教え。)

年 組 氏 名

「ことわざ」のなかには、同じような意味を表しているものがあります。

たとえば、その道にすぐれているものでも、場合によっては得意とすることで失敗することがある、といったとえとして使われる、

○猿も木から落ちる

○上手（じょうず）の手から水が漏（も）れる

○河童（かっぱ）の川流れ

（河童のように泳ぎの達者なもののでも、ときには水に押し流されることがあることから。）

○弘法（こうぼう）にも筆の誤（あやま）り

（弘法大師ほどの名筆家でも、ときには書きまちがいをすることから。）

などがその例ですが、これに似たことわざが外国にもあるというから驚きです。

○Even Homer sometimes nods.

（詩聖ホーマーでさえ、ときにはへまをやる。）

外国のことわざと似たような内容のことわざがある例は他にもあります。

○After a storm comes a calm.

（あらしの後にはなぎが来る。）

※「なぎ」は風がやみ、波が静かになること。

○雨降って地固まる

（雨が降った後はぬかるんでいた地面がかえって強く固まることから、もめごとや困難なことが起こった後はかえって物事がよくおさまることのたとえ。）

では、似たような内容のことわざをいくつかグループにして紹介しておきましょう。

まず、自分の専門のことでありながら他人のことであるにこそがしくて、自分自身のことになかなかまっ

ている暇がないことのたとえとして用いられることわざには、次のようなものがあります。

▼知っておきたいことわざ集2▲

○一日千秋（いちじつせんしゅう）の思い

千秋は千年のこと。一日が千年もの長さに感じられて、とても待ち遠しいこと。

○二兎（にと）を追うものは一兎（いっと）をも得ず

二羽の兎を一度にとらえようとして追いかけると結局一羽もとらえることができなくなるといことから、一度に二つの物事をしようとして欲を出す、結局どちらもだめになってしまうということのたとえ。古いローマのことわざから。

○三人寄れば文殊（もんじゅ）の知恵

文殊は、知恵をつかさどる文殊菩薩のこと。一人ではよいアイデアがうかばなくとも、三人集ま

○紺屋（こうや）の白ばかま

○医者（いしゃ）の不養生（ふようじょう）

○大工（だいこう）の掘立（ほったて）

○髪結（かみゆ）いの乱れ髪

また、いろいろとはたらきかけても何の手ごたえも効き目もないようなたとえとして使われることわざには次のようなものがあります。これらは、よく、人にいろいろとアドバイスしても、少しの効果もない場合などに用いられます。

○ぬかに釘（くぎ）

（ぬかに釘を打つようすから。）

○豆腐（とうふ）にかすがい

（かすがいは、材木をつなぐためのコの字型の釘。豆腐にかすがいを打つようすから。）

○暖簾（のれん）に腕押し

○柳（やなぎ）に風

今度は、反対の意味を表すことわざをセットにして紹介してみましよう。

○急がば回れ

○善（よ）は急げ

○人を見たら泥棒（どろぼう）と思え

（軽々しく人を信用してはいけない、ということ。）

○渡る世間に鬼（おに）はない

（この世の人は薄情そうに見えるが、困れば助けてくれるようなやさしい心をもっているものだ。）

○柳の下にいつもどじょうはおらぬ

（柳の木の下でたまたまどじょうをとらえたからといって、いつもその場所にどじょうがいるとは限らないということから、偶然に幸運を手に入れたからといって、同じ方法で再び幸運を得られるとは限らないことのたとえ。）

○二度あることは三度ある

って相談すれば、よい考えが得られるという教え。

○親（おや）の光（ひかり）は七光

本人にはそれほどの実力がなくても、親の社会的地位や名声によって、いろいろと有利に社会生活を送ること。

○腹八分目（はちぶんめ）に医者（い）らず

食事をとるときに、八分目ほどでやめておくとおなかに負担がかからず健康によいという教え。

○十人十色（といろ）

人はみんな、性格や考え方、好みがちまちだということ。

故事成語(1)

— 何事はく僧のこころを助長しや —

年 組 氏名

「故事成語」とは、中国に昔から伝わっている話も
とになって作られた言葉です。したがって、もともとなっ
ている話について知っていると、言葉の意味や使い方を
理解するのにとても役に立ちます。
たとえば、「杞憂（きゆう）」という故事成語は、何
事においても心配しすぎる男の話がもたなってできた
といわれています。

昔、杞（き）の国に住んでいた男の人が、くずれる
はずのない天がくずれ落ちてしまったらどうしようと
心配して、夜も眠れずに、食事ものを通らなかつた
というのです。

ふつうに考えれば、天がくずれ落ちてくることなどあ
り得ません。そこで、この話をもとにして、心配しなく
てもよいことをあれこれ心配することを「杞の国の人の
心配（憂い）」、つまり「杞憂」というようになったの
です。

作文の時間によく言われる「推敲（すいこう）」も、
やはり故事成語の一つです。

一度書いた文章をもっとよい文章にしようと、何度も
考えて作り直す意味で使われますが、これは、唐（とう）

の詩人が自分の作った詩の一部分を「僧は推（お）す月
下の門」とするのがいいか、「僧は敲（たた）く月下の
門」とした方がいいかどうかと苦心した話が多くなっ
てきた言葉です。「推」と「敲」のどちらにするか迷
ったことから「推敲」が生まれたわけです。
しかし、なかには、「助長（じょちょう）」のように、
もともとの故事（昔から伝わっている話）とは違った意
味に使われているものもあるので注意が必要です。

昔、宋（そう）の人が自分の苗の成長を早くしよう
として、苗を引っ張ったためにみんな枯らしてしまっ
たということです。

「助長」は、もともと「無理な力を加えることによつ
て、かえって悪い影響を与えること」という意味に使わ
れていた言葉だったのです。しかし、「助」「長」とい
う字から受ける表面的な感じによつて、現在では「成長
を助けること」の意味で使われるようになっています。
このように考えてみると、もともとなった故事と現在使
われている意味とを、上手に関係づけながら覚えておく
ことが大切だということになりますね。

完壁かんぺき	今度のテストのときは完璧だった。
「意味」完全で欠けたところがないこと。 「故事」昔、趙（ちよう）の国に見事な壁（ドーナツ型をした貴重な宝玉）があった。秦（しん）の昭王（しょうおう）がこれをだまし取ろうとしたが、使者の蘭相如（りんそうじよ）は、その壁を自分の国に無事持ち帰る使命を果たした。 ※「壁を完（まっと）うす」という意味でできた言葉だが、「完璧」と書く人がたまにいますので、要注意。	
破竹はちく	若乃花は、初日から破竹の勢いで勝ち進んだ。 「意味」とめることができないほど、激しい勢い。 「故事」「破竹」とは、竹を割るという意味。軍隊が勝ちに乘じて一気に攻め込むことを、初めの一節を割ると、後は一直線に割れる青竹にたとえていう言葉。
背水の陣はいすいのじん	あと一つ負ければおしまいだ。こうなったら背水の陣で若手選手を起用しよう。 「意味」絶体絶命のピンチに立たされたときに使われる言葉。 兵法の一つで、川を背にして陣をしくこと。一見不利な状況から、味方の決死の覚悟によって、戦いを勝利に導こうという戦法。 「故事」中国の漢の韓信（かんしん）が、重要な戦いで有利な山上からわざと川を背にした不利なところに陣を移し、兵士に決死の覚悟をさせて、大勝利をおさめた故事から。
杜撰ずえん	彼の作品は、いつもアイデアはすばらしいのだが、残念なことに作業が杜撰なんだ。 「意味」文章や詩などにまちが多いこと。またいかげんなこと。 「故事」宋（そう）の時代の詩人、杜黙（ともく）の作品が詩を作るうえのきまりに合わないことが多かったという話から生まれた言葉といわれる。 ※この説には、異説も多いといわれる。
登龍門とうりゅうもん	一男君は、文壇の登龍門といわれる文学賞を受賞した。 「意味」出世をするために、通り抜けることのむずかしい関門のたとえ。 「故事」黄河の上流に龍門といわれる流れの急なところがあり、その急流をさかのぼることができた鯉（こい）だけが龍になれるという言い伝えがある。 ※ちなみに、日本の鯉のぼりにも龍になったときに角が生えるという「つむじ」が描かれているという。
白眉はくび	テニス部では岡さんが歴代選手の中で、白眉の存在だね。 「意味」多くのものの中でもっとも優れているものや人のこと。 「故事」三国時代の蜀（しよく）の国に秀才として有名な五人の兄弟がいた。中でも、眉の白い長兄が特にすぐれていたことから。

故事成語(2)

人生への教訓

年 組 氏名

鶏口（けいこう）となるも牛後となるなかれ

鶏の頭になっても、牛の尻にはなるなということ、大きな集団の中で人に従ってついていくよりも、小さな集団でもいいからその中で長になれという教え。

虎穴（こけつ）に入らずんば虎子（こじ）を得ず

虎の住む洞穴に入らなければ、虎の子をとらえることはできないということから、思い切って冒険をしなれば大きな成果はあげられないことのたとえ。

百里を行くものは九十を半ばとす

百里の道のりを歩こうとする人は、九十里まで歩いても、まだ半分だと考えて、残りの十里を進んだ方がいいということから、物事は、終わりのわずかなところがいちばん難しいので、九分どおり仕上がっても、まだ半分だと考えてちようどよい、という心構えのたとえ。

先んずれば人を制す

人より先に事を行えば、人をおさえることができ、何事にも後手に回ってはいけないということ。「機先を制する」「先手を打つ（取る）」「先制攻撃」なども同じ意味で使われる。

千丈（せんじょう）の堤（つつみ）もろうぎの穴（けつ）をもつて潰（つい）ゆ

「ろうぎ」は「螻蛄」で、蛄は「おけら」、蟻は「あり」。どちらも土に小さな穴を掘って住んでいる昆虫。千丈の堤とは、たとえばダムや堤防とか、大河の堤防とか、よほどのことでもくずれないもの。そんな堅固な堤でも、おけらやありのちつぽけな穴がもとでくずれることから、ささいなことが大事を引き起こすので、物事は慎重のうえにも慎重に、ということのたとえ。「蟻の穴から堤がくずれる」ともいう。

瓜田（かでん）に履（くつ）をいれず

瓜の畑で、はき物が脱げても、かがみこんではき直すようなことはするな、そんなことをすると、瓜を盗むのかと人に疑われてしまうことから、人に疑われるような紛らわしいことはするなという教え。

五十歩を以って百歩を笑う

戦場で、五十歩逃げた者が、百歩逃げた者を臆病だと笑ったことから、たいして変わりのないこと、たいしたことはないということ。五十歩百歩ともいう。

「故事成語」には、昔からの人々の知恵が生きています。したがって、わたしたちが世の中で生活していくうえで、とても参考になる教訓を含んだ言葉が少なくありません。

わたしたちはよく、他人と自分を比較することによって、自分自身のあり方について考えることがあります。「人のふり見てわがふり直せ」などとも言いますが、「故事成語」の中から、そうしたことを表現した言葉を探してみると、「他山（たさん）の石」があげられます。

よその山からとれた質の悪い石でも、砥石（といし）として使えば自分の玉をみがくの役に立ってることができるといふことから、他人の誤った言行や失敗も自分の修養の助けにすることができるといふのです。「他山の石」は、自分の石（つまり自分の知徳）をみがくの役に立つ他の山の石（つまり他の人の言動のこと）を指しています。

注意が必要なのは、自分の修養の助けとなる、人の誤った言行を「他山の石」というのであって、他人のよい例を引き合いに出して「他山の石としたい」などとは言わない点です。

わたしたちはよく「○○さんを見習いなさい。」という言葉を耳にします。これは、○○さんのすぐれたところに学びなさいという意味です。ところが、昔の人は「他山の石」と言って、他の人のまちがった行いや失敗からも多くのことを学ぶように教えています。みなさんは、このようなことを考えた昔の人についてどう考えますか。

「他山の石」と「○○さんを見習いなさい。」という表現とを比較して考えるということは、実は、古い時代の人々の考え方に触れるとともに、現代を生きる人々の考え方についても考えることになっているのです。二つを比べて考えたことで得られた答えについては、それぞれの人の判断にまかせたいと思いますが、「故事成語」には、今、みなさんが試みようとしたことを、まさに表現した言葉もあるのです。

それは、「温故知新（おんこちしん）」「故（ふる）きを温（あた）めて新しきを知る」という言葉です。過去の事柄や昔の人のすぐれた思想などを研究して、それをもとに現実の問題について考え、新しい道理や知識を発見するという意味の言葉です。わたしたちが歴史を学んだり、いろいろな本を読んで物事を考えたりすることも、「温故知新」の一つなのだと考えられます。

では、わたしたちの生き方に貴重な知恵をたくさん授けてくれる「故事成語」について整理していくことにしましょう。しかし、「故事成語」はあまりに多くてどこから手をつけていいのかわかりません。そんなときに、参考になるのが、この言葉。

「まず隗（かい）より始めよ」

（偉大な計画も最初はまず手近なところから着手しなさいという教え。また、人にあれこれ言う前に、言い出した人からまず実行に移しなさいという教え。）
そうです。「千里の行（こう）も足下（そくか）より始まる」（千里の道も足もとの第一歩から始まる）のですから、まずは、代表的な「故事成語」の意味を覚えることから始めましょう。そして、いつか機会をつかまえて使ってみてはどうでしょうか。

十二支のついで (1)

年 組 氏 名

みなさんは、年賀状に動物の絵をかいたことはありませんか。ねずみとか、うしとか。それらの動物は、いったい何を表しているのでしょうか。
中国では古くから、ある十二の漢字で方位や年・月・日・時刻などを表す習慣がありました。本来それぞれの漢字に動物の意味はなかったのですが、いつのころからかその一つ一つに獣をあてはめるようになりました。この十二の漢字のことを十二支といいます。
十二支が日本に伝わったのは千三百年ほど前といわれます。そして現在でも年賀状などにその習慣が残っているのです。

十二支

子	(シ)	ね (ねずみ)
丑	(チュウ)	うし
寅	(イン)	とら
卯	(ボウ)	う (うさぎ)
辰	(シン)	たつ
巳	(シ)	み (へび)
午	(ゴ)	うま
未	(ビ)	ひつじ
申	(シン)	さる
酉	(ユウ)	とり
戌	(ジュツ)	いぬ
亥	(ガイ)	い (いのしし)

古典の中には、十二支を用いた以外の時間の表し方も使われています。
現在にも残る言葉がたくさんあるので、探してみましよう。

冬			秋			夏			春			
十二月	十一月	十月	九月	八月	七月	六月	五月	四月	三月	二月	一月	月
師走	霜月	神無月	長月	葉月	文月	水無月	皐月	卯月	弥生	如月	睦月	月の異名
大雪 (1月6日ごろ)	小寒 (1月20日ごろ)	冬至 (12月23日ごろ)	大雪 (12月8日ごろ)	小雪 (11月23日ごろ)	立冬 (11月8日ごろ)	霜降 (10月23日ごろ)	寒露 (10月8日ごろ)	秋分 (9月23日ごろ)	白露 (9月7日ごろ)	処暑 (8月23日ごろ)	立秋 (8月8日ごろ)	立秋 (8月8日ごろ)
大暑 (7月24日ごろ)	小暑 (7月7日ごろ)	夏至 (6月21日ごろ)	芒種 (6月5日ごろ)	立夏 (5月5日ごろ)	小满 (5月21日ごろ)	夏至 (5月21日ごろ)	芒種 (6月5日ごろ)	立夏 (5月5日ごろ)	小满 (5月21日ごろ)	雨水 (2月18日ごろ)	立春 (2月4日ごろ)	二十四節気

こんな文があります。
いぬの時ばかり、みやこのたつみより火いできて、いぬにいたる。
これは、鎌倉時代に書かれた『方丈記』という文章の一節です。
古典などを読んでみると、ときどき方位や時刻などを十二支で示した表現に出会います。方位や時刻を、十二支を用いてどのように表すか、その表し方を紹介しましょう。

古方位

方位を表すときは、八等分します。東西南北に十二支を一つずつあてはめ、残った八つの文字は二つ一組みにして使います。



古時刻

二十四時間を十二等分し、それぞれに十二支をあてはめていきます。夜の十一時から一時までを子の刻、一時から三時までを丑の刻というように、一つの刻が二時間となります。(これには異説もある)

また、一つの刻をさらに四つに分けたい方もあります。「丑三つ」というのは、丑の刻を四等分したうちの三つめ、つまり二時から二時半ということになります。



十二支のひみつ

年 組 氏名

ここにカレンダーがあります。日付の下に「かのえうま」と書いてあります。この「うま」は十二支の「午」。十二支はそもそも年・月・日などを表すのに用いられるものでした。では、「かのえ」は何でしょう。



十二支と同様、中国で年・月・日などを表すために用いられた、十の漢字があります。これを「十干」といいます。「かのえ」というのは、十干の訓読みです。

癸	壬	辛	庚	己	戊	丁	丙	乙	甲
(キ)	(ジン)	(シン)	(コウ)	(キ)	(ボ)	(テイ)	(ヘイ)	(オツ)	(コウ)
みずのと	みずのえ	かのと	かのえ	つちのと	つちのえ	ひのと	ひのえ	きのと	きのえ

十干

き・ひ・つち・か・みず
というのは
木・火・土・金・水
のこと。
この五字を「五行」といいます。
「もっかどごんすい」と
覚えるといいですね。

右から横に読んでごらん。
えとえと……、となるだろう？
だから「えと」という言葉が
うまれたんだ。

十干と十二支とは、組み合わせ使われます。これを「十干十二支（えと）」といいます。十干十二支の組み合わせは、全部で六十通りです。

1 甲子	きのえね	21 甲申	きのえさる	41 甲辰	きのえたつ
2 乙丑	きのとうし	22 乙酉	きのとり	42 乙巳	きのとみ
3 丙寅	ひのえとら	23 丙戌	ひのえいぬ	43 丙午	ひのえうま
4 丁卯	ひのとう	24 丁亥	ひのとい	44 丁未	ひのとひつじ
5 戊辰	つちのえたつ	25 戊子	つちのえね	45 戊申	つちのえさる
6 己巳	つちのとみ	26 己丑	つちのとうし	46 己酉	つちのとり
7 庚午	かのえうま	27 庚寅	かのえとら	47 庚戌	かのえいぬ
8 辛未	かのとひつじ	28 辛卯	かのとう	48 辛亥	かのとい
9 壬申	みずのえさる	29 壬辰	みずのえたつ	49 壬子	みずのえね
10 癸酉	みずのととり	30 癸巳	みずのとみ	50 癸丑	みずのとうし
11 甲戌	きのえいぬ	31 甲午	きのえうま	51 甲寅	きのえとら
12 乙亥	きのとい	32 乙未	きのとひつじ	52 乙卯	きのとう
13 丙子	ひのえね	33 丙申	ひのえさる	53 丙辰	ひのえたつ
14 丁丑	ひのとうし	34 丁酉	ひのとり	54 丁巳	ひのとみ
15 戊寅	つちのえとら	35 戊戌	つちのえいぬ	55 戊午	つちのえうま
16 己卯	つちのとう	36 己亥	つちのとい	56 己未	つちのとひつじ
17 庚辰	かのえたつ	37 庚子	かのえね	57 庚申	かのえさる
18 辛巳	かのとみ	38 辛丑	かのとうし	58 辛酉	かのととり
19 壬午	みずのえうま	39 壬寅	みずのえとら	59 壬戌	みずのえいぬ
20 癸未	みずのとひつじ	40 癸卯	みずのとう	60 癸亥	みずのとい

この十干十二支は、月・日などにも使われますが、年に用いた言い方はその年に起こったことやものの名前に使われたりもして、身近です。

○甲子園

兵庫県の甲子園球場は、大正十三（一九二四）年の完成。この年は、十干十二支であてはめると「甲子（きのえね）」だったの、こう名づけられました。

○戊辰戦争

一八六八年、戊辰の年に始まった維新政府軍と旧幕府軍との戦争。「戊辰（つちのえたつ）」の年に始まったということ。

○壬申の乱

大海人皇子と大友皇子との争い。六七二年に起こりました。六七二年は「壬申（みずのえさる）」にあたります。



また、満六〇歳のことを還暦（かんれき）といいます。還暦とはこよみが一回りする、という意味です。例えば甲子（きのえね）に生まれた人が満六〇歳になる年は、再び甲子です。つまり、これも十干十二支に基づいた慣習ということになりますね。

さあ、それでは問題です。二十一世紀の最初の年、二〇〇一年は「辛巳（かのとみ）」です。それでは今年は何にあたりますか。また、あなたの生まれた年は？ 考えてみましょう。

日本の物語文学
——その発生——

年 組 氏名

作の物語

竹取物語

成立時期は、九世紀から十世紀初め。作者不詳。

日本最古の物語。わが国や外国の伝説・説話が材料になつていと思われ。竹の中から見つけれられた三寸ほどの光り輝く女の子が三か月の間に美しく成長するなど、超現実的な要素を持つてゐる。

伊勢物語

作者と成立時期は不詳。在原業平の物語ともいわれる。

昔、男、初冠して、奈良の京、春日の里に、領るよしして、狩りに往にけり。

昔、一人の男が初めて冠をかぶる儀式、つまり元服（成人式）をして、奈良の春日の里に領地をもつていたので、そこに狩りに出かけた。

『伊勢物語』の書き出しは、このように始まる。一二四段から成り、どの段も「むかし男ありけり」あるいは、「昔、男」と書き出され、全体が一人の主人公で統一され、元服から臨終にいたる事件をからませて、伝記のようになってゐる。物語は、筋の展開を示す地の文と、和歌によつてつづられてゐるので、歌物語と呼ばれる。

第一段は、春日の里で見つけた姉妹に心を奪われ、紫草の染料で染めた模様さながらに心が乱れたと次の歌を贈つたという話である。

春日野の若紫のすり衣

しのぶの乱れかぎり知られず

説話物語

事実として口頭で語られてきたこと、または事実と信じられて語られてきた話をつづつたもので、最も古いものは、『日本霊異記』とされる。仏教との関係も深い。

今昔物語集

十二世紀成立。作者不詳。

千編を超える話を収め、話は、天竺（インド）、震旦（中国）、本朝（日本）にわたつてゐる。すべての話が「今は昔」で始まつてゐるのでこの名がある。近代の小説家芥川龍之介は、この作品や、次の『宇治拾遺物語』などに題材をとつて、知的に現代化した作品を書いてゐるが、次の一節も、作品『羅生門』の題材となつた話の部分である。

盗人、あやしと思ひて連子より臨きければ、若き女の死にて臥したるあり。其の枕上に火を燃して、年極く老たる姫の白髪白きが、其の死にし人の枕上に居て、死にし人の髪をかなぐり抜き取るなりけり。盗人がおかしいと思つて連子からのぞいてみると、若い女が死んで横たわつてゐた。その頭の上で、灯火を灯して、ひどく年老いた老婆が、枕元で死人の髪の毛を必死に抜き取つてゐた。

宇治拾遺物語

編者不詳。

『今昔物語集』と並んで、説話文学の代表作品とされる。『今昔物語』に採られてゐる話もあるが、当時の人々の姿、生活ぶり、貴族や僧侶の失敗談など、平安時代の語り口のように平明、軽妙で生き生きと伝えている。「鬼に瘤取らるること」「雀報恩の事」などよく知られてゐる話である。

源氏物語

十一世紀初めに成立。紫式部作。

いづれの御時にか、女御更衣あまた侍ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。はじめよりわれはと思ひあがり給へる御方々、めざましきものに恥しめ嫉み給ふ。何帝の御代であつたか、女御・更衣などのお妃がたがおられた中に、それほど身分の高いほうではなかつたが、帝に愛されて格別羽振りのよろしいかたがあつた。最初から我こそはと宮中に上つたお妃がたは、そのかたを癪にさわるかただとおとしめ嫉妬なされた。

源氏物語の冒頭であるが、帝に愛されたこの女性に生まれた皇子光源氏が、この物語の主人公である。この皇子は、容姿・才能とも拔群であつたが、父帝は、将来を考え、臣下の身分とされた。物語は、亡き母の面影を慕う光源氏の多くの女性との恋愛や、宮廷での出世競争などを中心に、貴族社会の日常生活が写實的に描かれてゐる。五十三帖から成り、多数の人物が登場する。後の文学にも影響を及ぼし、近代の多くの小説家たちが、これを熟読し、現代語に訳してゐる。日本の古典文学の傑作とされる。

歴史物語

藤原道長を頂点とする摂関政治が終わり、貴族中心の世の中が移り変わるうとする平安時代の末期に、貴族社会に対する思慕の気持ちや批判の念から歴史物語が書かれ始めた。

栄花物語（平安後期の成立。）

仮名で書かれた最初の歴史物語で、道長時代の全盛時を回顧し、道長を光源氏にたとえて、ひたすら賛美して書かれてゐる。編年体で、藤原家にゆかりのある女房によつて書かれたとされている。

大鏡（一一〇九年の成立。）

同じく藤原氏の栄華を描きながら、「鏡に照らしたごとく」過去の摂関政治を批判的にながめた書き方をしている点で、『栄花物語』と異なるところがある。人物中心の紀伝体で書かれ、歴史上の諸人物の性格が生きた生きと描かれていて、後の歴史文学に影響を与えた。

軍記物語

院政時代の後期（十二世紀後半）皇位継承と貴族の権力争いから保元の乱がおこり、ついで平治・治承・寿永の戦乱となつたが、これらの戦乱の始終を題材とした文学が、軍記物といわれる作品である。

保元物語・平治物語

十二世紀後半ごろ成立。作者不詳。

平家物語

十三世紀前半ごろ成立。信濃前司行長の作といわれる。

琵琶法師によつて語られるこの作品は、多くの人に親しまれた。平清盛を中心とする平家一門が、どのようにして栄華を極めるに至つたかを述べ、清盛やその近親者たちの悪業が語られる。そして、平家の子孫が、清盛らの悪業によつて滅びるところで十二巻が終わる。様々な登場人物の生き生きとした姿が、栄枯盛衰の主題のもとにとらえられてゐる。

竹取物語

——日本最古の物語——

年 組 氏名

美しく成長したかぐや姫をめぐる五人の求婚者たち
竹取の翁と妻の姫に大切に育てられた「なよ竹のかぐや姫」は、三か月ほどで、またたくまに美しい女性に成長しました。その美しさは、本当に光り輝くほどでした。かぐや姫の評判は高くなり、多くの男性が求婚しました。なかでも五人の貴公子が特に熱心でしたので、姫は一人一人に要求を出し、かなえてくれたら結婚すると約束しましたが、それは、どれもとても難しい要求でした。五人の貴公子は、姫と結婚したために、あれやこれやと策略をめぐらしたり、苦勞したりして、この難題に挑戦しますが、……

①石作皇子と仏の石の鉢

石作皇子にかぐや姫が出した難題は、遠くインドの国まで行って、お釈迦様が持っていた鉢を持ち帰ってくるというものでした。

石作皇子は目先のきく人で、「天竺（インド）にも二つとない鉢を、たとえ百千里の距離を乗り切って出かけても、とって来られるはずがない。」と考えて、天竺には行かず、三年ほど待って、大和の国の山寺にある、まっ黒い墨のついた鉢を取ってきて、錦の袋に入れ、旅の苦勞をまことしやかに綴った歌をつけて、かぐや姫に差し出します。それを見たかぐや姫は、

おく露の光をだにぞ宿さまし

小倉山にて何もとめけん

もし真実の仏の石鉢なら、置いた露が反射するほどに光るはず。しかし、すこしも光らないではありませんか。あなたは、あの小暗い小倉山で、こっそり何をしていたのですか。

と、石作皇子のうそを見破ってしまいます。



②庫持皇子と蓬萊の玉の枝

庫持皇子に与えられた難題は、「東の海、蓬萊」にある「銀を根とし、金を茎として、白き玉を実として立てる木」を一枝持ち帰ってほしいというものでした。

庫持皇子は策略に秀でた人で、当時の有名な鍛冶職人たちを集めて、ひそかに全財産をかけて、三年がかりで、玉の枝を作らせたのです。やっとできあがった玉の枝を持ってかぐや姫のもとにやってきた庫持皇子は、得意気に架空の苦勞話をかぐや姫に披露します。皇子が話した蓬萊の山とはどんな所だったのでしょうか。

その山見るに、さらに登るべきやうなし。その山のそばひらをめぐれば、世の中になき花の木ども立てり。金・銀・瑠璃色の水、山より流れいでたり。それには、色々の玉の橋渡せり。そのあたりに、照輝く木ども立てり。

かぐや姫の昇天

こうして、五人の貴公子たちの難題に対する挑戦は、いずれも失敗に終わります。帝からの求婚さえも固く断ったかぐや姫は、翁に、自分が月の都の者で、八月十五日には迎えが来て、月の都に帰らなければならないことを話します。帝の兵二千人あまりで家を守り固め、姫を月に帰すまいとする翁の願いもむなし、姫は昇天してしまいます。

その山は、見ると、全く登る道がありません。その山の斜面を回っていくと、この世のものでない美しい花が咲いています。金色・銀色・瑠璃色の水が山から流れていて、さまざまな色をした宝玉で作った橋がかかっています。

ところが、皇子の苦心の作り話も、ほうびを請求する鍛冶職人たちが現れて、うそがばれてしまいます。世間の笑いものになることを恐れて、庫持皇子は行方をくらましてしまいます。

③阿部右大臣と火鼠の皮衣

かぐや姫に「唐（中国）にある火鼠の皮衣」を求められたのは、財産家の阿部右大臣でした。

右大臣は、唐船に乗って交易に来ていた王けいという人のもとに家臣を遣わして、火鼠の皮を買ってきてほしいとお金を託します。王けいは、天竺まで行って求めたという皮衣を右大臣に届けます。かぐや姫の「本物ならば火の中に入れても燃えないはず」という言葉を聞いて、右大臣が試しに燃やしてみると、美しい皮衣はめらめらと燃えてしまったのです。

④大伴大納言と竜の首の玉

大伴大納言に与えられた難題は、「竜の首に五色に光る玉」でした。

大納言は、家来たちに命令して、五色の玉を探しに行かせますが、家来たちは、みな怖がって、お金だけもらってかくれてしまいます。大納言は自ら船を仕立てて、玉探しに出かけますが、船は南海の孤島に漂着し、大納言も病気になるてしまいます。竜のたたりを恐れた大納言は、こんな難題を出したかぐや姫をあきらめます。

⑤石上中納言とつばめの子安貝

五人目の貴公子石上中納言に与えられた難題は、「つばめの持ちたる子安貝取りて賜へ」というものでした。

中納言は、「子安貝はつばめが子を産む時にできるそうだ」と聞いて、つばめが巣を作るのを待ちます。かごに乗って自ら子安貝を探そうとした中納言は、家来たちが誤って綱を操作したため、落ちてしまいます。高いところから落ちたショックと子安貝を手に入れられなかった失敗を悔やんだ中納言は、病の床に伏せり、そのまま死んでしまいます。

源氏物語

時は平安時代。巷では、藤原氏を中心とした貴族政治が華やかに行われていたころ、「光源氏」という、「光り輝くほど」美しく、魅力的な一人の男性を主人公として生まれた物語が、『源氏物語』です。作者は紫式部。一条天皇の後、中宮彰子に仕えた女房でした。場面ごとに、数数の和歌をおりませた『源氏物語』は、全部で五十四帖もありますが、紫式部が書いていくそばから大評判になり、貴族の子女たちはみんな「源氏」を夢中になって読みました。（そのころは印刷技術がなく、本はすべて人の手で書き写されていたので、続きが読みたくてもなかなか手に入らなかったのです。）



それではいったい、千年前の貴族を夢中にした、ゲンジモノガタリって、どんなものなのでしょう？

スーパーマン光源氏の「光と影」

帝を父に、桐壺更衣という女性を母に生まれた源氏は、幼いときに母を亡くし、また父帝の考えもあって貴族の列からは外れてしまいますが、それを除けば、父である天皇や人々皆に愛され、本来の優れた資質もあいまって世の中に二人としない、美しく魅力的な若者に成長します。

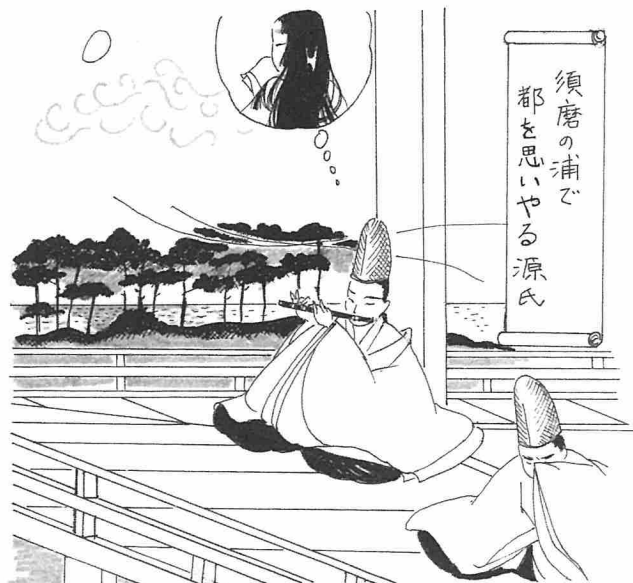
ちなみにどんなふう「魅力的」だったかというところ……まず、「身分が高く」「美形」で、「スポーツ（蹴鞠・弓）万能」「和歌が上手」「漢詩・漢文も得意」「音楽（琴・笛）名人級」「字も絵もうまい」、そしてなんと「情熱的で優しい」その性格……といったところでしょう。

だから、当然恋人もいっぱい、御厨子は女の子からのラブレターでいっぱい、の源氏なのです。でも、残念ながら源氏には、ただ一つの「悪い癖」が……！それは、（皆さんにも覚えがありませんか？）「どうしたって無理なこと」に夢中になってしまうこと……。

例えば、障害のある恋ほど「燃えて」しまい、政敵である右大臣の娘（朧月夜）と秘密の恋をしたり、義理の母である、父帝の新しい后（藤壺）を愛してしまったり……。その結果、さまざまな事件をひきおこし、順風満帆とはいいがたい運命をさまようことになります。無実の罪を着せられて、須磨・明石の浦に三年間隠れ住んでいたこともありました。



年 組 氏 名



でも、そうやって世の中を知り、人間的にも成長していった源氏は、運命の力に導かれ、最後には准太上天皇という高い位にまでのぼりつめるのでした。

それでは、「悪い癖」はそれとして、光源氏は並ぶものない夢のような一生を送った……のでしょうか？

物語には、王朝絵巻そのままの、理想的できらびやかな生活が描かれると同時に、源氏にまつわるさまざまな人間模様が映し出されています。権勢を求める公卿、子や孫の出世を願う老人、親子のつらい別れ、恋路を阻まれ迷う若人たちなど……。彼らは皆、それぞれの身分・立場に応じた悩みをもつわけですが、それはけっして源氏といえども無縁ではありません。心ならずも、愛する人を傷つけ、不幸にし、自分自身もひとり罪の意識に苦悩する源氏は、並びない栄華を謳歌する天下人であると同時に、自らの宿世と因果におののく孤独な人間でもあるのでした。

このように見てくると、紫式部は、その巧妙な筆によって、人が生きていく上で避けて通れない「影の部分」といったものを読者に問いかけているようです。

光源氏が産声をあげる「桐壺」の巻から、源氏の子、薫を主人公とした最後の宇治十帖まで含めて、『源氏物語』には大勢の人が登場しますが、これらの巻々を通して、彼らの喜怒哀楽は、けっして単なる昔物語ではないことに気づくことでしょう。優美な歌や、音楽、四季の美しさを愛するともに、ひたむきに恋に生き、恋に死んだ王朝の人々の「雅びな世界」をのぞいてみませんか？

きつと千年の時を超えて、皆さんがこれから出会うであろう、さまざまな愛と生の姿が見えてくるはずです。

気軽に読める「源氏物語」

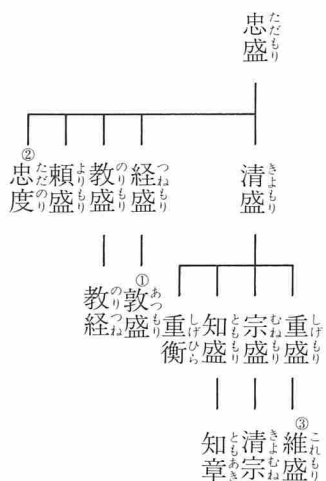
- 文庫本で現代語訳してあるもの
 - 谷崎潤一郎訳『源氏物語』 中公文庫
 - 円地文子訳『源氏物語』 新潮文庫
- 漫画でもあるゾ
 - 大和和紀『あさきゆめみし』 講談社

でも、古語の美しい言葉遣いと響きを味わえ、あわせて古典の勉強にもなるのは、やはり原文で読むこと。ぜひ古文のそのままの文章にもトライしてほしい。図書館に行けば、小学館の「日本古典文学全集」など、古文を主として、その現代語訳がついている本がそろっているはずです。

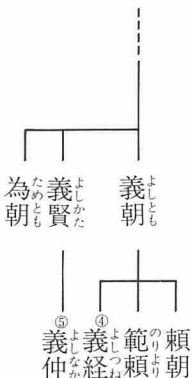
平家物語の武将たち

年 組 氏名

平氏略系図



源氏略系図



武人でありながら、

風雅な一面をもつ敦盛、忠度

① 敦盛

平家の若武者敦盛は、一の谷の合戦に敗れ、海へ逃れようとしたところを、功名心にはやる熊谷次郎直実と呼びとめられ、組み伏せられる。熊谷は、敦盛が自分の息子と同じ年ごろであり、そのうえ、美しい容貌や堂々としてりっぱな態度に心を動かされ、討つことができない。なんとか助けようとするのだが、源氏方の軍がすぐそこに迫ってきているため、泣く泣く自分の手で敦盛を討つ。

敦盛は笛にすぐれ、戦の陣地においてもかなでるほどであった。一の谷の合戦で討たれた時も、腰に錦の袋に入れた笛をさしており、その風雅さが直実をはじめ東国の武者たちの涙を誘った。

② 忠度

平家一門の中であって早くから和歌に熱心であった忠度は、都落ちのときにも途中から引き返し、和歌の師である藤原俊成を訪ねる。そして、日ごろ詠んだ歌を集めた歌集を一卷、形見として残していた。

都落ちから半年後、忠度は一の谷の合戦で討たれるが、そのえびら（矢を入れて背負う武具）には、歌を一首書きつけたものが結びつけられていた。

世の中が平和になり、『千載集』が編まれた時には、忠度が形見として俊成に手渡した歌集の中から、一首が、「読み人知らず」の歌としてのせられた。

大將軍として戦いながらも

家族への思いを断ち切れなかつた維盛

③ 維盛

維盛は、「光源氏」と呼ばれるほどの美貌の持ち主であり、また富士川や俱利伽羅峠の戦いでは大將軍として戦ってきた。

都落ちの際には、一門の者がみな妻や子供を連れてゆく中で、維盛だけは、いっしょに行きたいと泣き慕う家族と別れ、一人で都を落ちてゆく。しかし、

都に残してきた家族への思いは、いつになっても断ち切ることができない。一の谷の合戦に敗れ、からくも逃げ帰ってきた屋島では、「生きていてもしかたがない」と言って、こっそりと館を抜け出し、高野山へと向かう。途中、何度も都へもどり妻や子に会いたいという気持ちにかられながらも、高野山の滝口入道のもとで出家する。そして、入道とともに熊野もうでをした後、最後まで妻や子を思いながら、那智の沖で入水する。

悲劇と伝説のヒーロー、義経

④ 義経

幼名牛若丸。弁慶との五条大橋での出会い有名。七歳の時、鞍馬寺に入り、以後、平泉に赴いて、奥州藤原氏の庇護を受けたといわれる。兄頼朝を助け、義仲追討、一の谷の戦い、屋島の戦いで次々に勝利をあげ、平家の滅亡に最も大きな功労をあげた。しかし、次第に、兄頼朝と対立を深め、ついには頼朝から追われる身となった。奥州平泉に追い詰められた義経は、残った弁慶ら忠臣とともに、一生を終える。その一生があまりに悲劇的であったためか、義経には多くの伝説が残されている。また、各地に、義経にちなんだ地名も多い。

木曾の英雄、義仲

⑤ 木曾義仲

頼朝に遅れること一か月、木曾で挙兵した義仲は、横田河原、俱利伽羅峠で次々と敵を退け、都入りする。法皇からは「朝日將軍」の称号を贈られるが、都では、その言動の田舎者ぶりが、事あるごとに笑われる。

都を治めることもできず、法皇の支持も失い、水島の合戦で平家に敗れ、さらには頼朝との関係もうまくいかなくなるなど、最後には全くの孤立無援の状態となり、とうとう頼朝の命令をうけた義経、範頼の軍に追われる身となる。

都から琵琶湖畔の瀬田まで追いつめられた義仲は、最後には、乳兄弟の今井兼平とたった二騎だけとなり、互いに相手の身を案じつつ討死する。

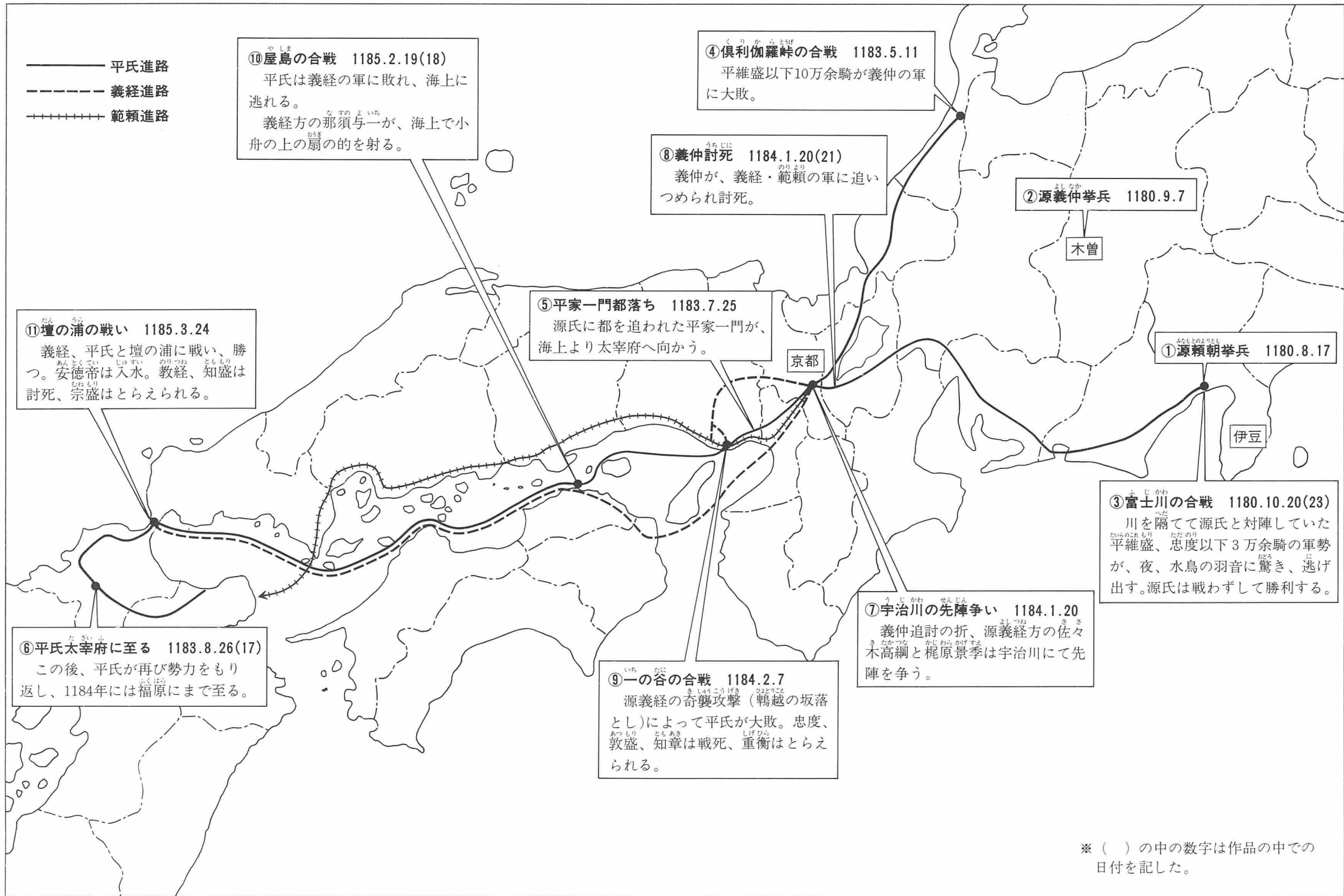
平家一門の最後——壇の浦の戦いで武将たち

敦盛、経盛は、よろいの上にいかりを背負い、兄弟で手に手をとって海に沈み、資盛、有盛、行盛の三人も互いに手を組んで沈んでいた。しかし、都落ち以来、平家の総指揮官であった宗盛と、その子清宗は、船の上でうろろするだけであった。余りの情けなさに、平家の侍が二人を海に突き落とすが、泳ぎまわっているうちに源氏方に捕らえられてしまふ。

平家方の勇将として武勇を誇った教経は、敵の大將義経に組もうとするが果たせず、最後は、人並みはずれた力もちの敵三人を道連れにして、海に飛び込む。こうして平家一門の人々の最期を見届けた平家方の知将知盛は、「見るべき程の事は見つ、今は自害せん（見届けるべきことはすべて見届けた。今はもう死ぬしかない）」と言って、よろいを二つ身につけ、海に沈んでいった。

源平合戦地図

年
組
氏名



防人の歌

年 組 氏名

◆防人とは

防人は七世紀の中ごろ、唐の制度に習って設けられた九州・対馬・壱岐の守備隊の兵士である。正式には「ぼうじん」と読むが、崎守、つまり国の突端を守る人という意味で、和語としては「さきもり」と呼ばれた。

万葉集でいえば後期、八世紀中ほどの奈良時代になると、わが国には、公地公民制を基盤とする律令国家が完成してはいたが、毎年のように襲った干害（日照り）と飢饉、天然痘の大流行に苦しめられた。そうした中でも、いつ押し寄せてくるかもしれない唐や新羅に備えて、防人による西方の守りを固めねばならなかったのである。

防人として動員されたのは、相模・上総・常陸・下野・下総・上野・武蔵といった坂東諸国に、遠江・駿河・信濃を加えた十か国の農民男子で、総勢約二千人。いわゆる単身赴任で、役人に引率されて難波の港に集められ、そこからは船に乗せられ、筑紫の大宰府など任地へ運ばれた。難波までの食料は自弁である。任期は三年で、三年ごとの半数交替が、一応定められていた。

彼ら防人のだれもが、農家の貴重な働き手であった。農家は租・庸・調という毎年の重い税を負わされているほか、男子には、徭役といって、年間何十日もの労働が課せられていたことを考えれば、防人という任務がどんなにつらく大きな負担であったか、推察できよう。

◆万葉集に収められた防人の歌

巻二〇に九三首あるほか、巻一四の東歌も防人の歌を七首含んでおり、巻一三にも防人の妻の歌らしい二首がある。これらを合わせると、一〇二首である。

巻二〇の九三首は、天平勝宝七（七五五）年、兵部少輔として、難波で防人の点呼をとって乗船させる任務に従事していた大伴家持が、諸国の役人に命じて提出させたものを、選んで後に万葉集に収録したものである。作者名は一応記されているが、古くから伝わる歌、他人の歌、代作してもらった歌などを提出した者もいたにちがいない。それでも、万葉集に名もない農民・兵士の歌が収められたことは、すばらしいできごとといえる。

◆防人の歌を味わおう

防人の歌のほとんどは、当時の東国の方言やなまりで歌われ、そのまま万葉仮名で表記されている。それだけに都の皇族や貴族の歌には見られない地方色と、飾り気や気どりのない表現、素朴で力強い調べ、いつわりのない情感が胸を打つ。ここにとりあげたのは、わずか八首だが、この中にも、そうした特徴が感じとれると思う。

わが妻はいたく恋ひらし飲む水に影さへ見えて世に忘れず
（遠江・若倭部身麻呂）

「恋ひらし」は「恋ふらし」の発音がなまったもの。「かご」も「かげ」がなまった方言である。「世に」は、「まことに・ひじょうに」の意味の副詞。

〔大意〕 妻はひどく私を恋しがっているようだ。飲む水にまで彼女の面影が映って見えるので、どうにも忘れることができないよ。

大君の命かしこみ磯に触り海原渡る父母を置きて
（相模・丈部造人麻呂）

難波の港から船出して任地へゆく途中の歌。「大君の命」は、天皇の仰せ、命令。「かしこみ」は、つつしんで承って、ということ。「磯に触り」とは、海岸線をす

れすれに船で行くことを、実景を加味して表現している。

当時の船はもちろん木造で、風波にはもろかったから、なるべく陸地を離れないように航海した。心細さと、父母恋しさの切ない思いがにじんでいる歌だ。

〔大意〕 省略。

吾等旅は旅と思ほど家にして子持ち瘦すらむわが妻かなしも
（駿河・玉作部広目）

「わろ」は「われ」の東国方言、「おめほど」も「おもへど」のなまり。「いひ」も同じ。「イ」と「エ」がきわめて似た音で発音される傾向は、現代でも広く東北、関東、北陸などに残っている。

〔大意〕 自分の旅は、任務で行くのだから仕方がないとあきらめているが、家に残してきた妻は幼子をかかえてやせ細ってゆくだろう。かわいそうでたまらないなあ。わが母の袖持ち撫でてわが故に泣きし心を忘れぬかも
（上総・物部乎刀良）

「袖」は母の袖ではなく、作者の袖を母が手にとって泣いたのである。「忘れぬ」は「忘れられぬ」と同じ。

〔大意〕 防人に私が行くのを悲しんで、母が私の袖を手にとり撫でながら泣いた、その心が忘れられない。

防人に発たむ騒ぎに家の妹が業るべき事を言はず来ぬかも
（常陸・若舎人部広足）

「家の妹」は、妻である。「業る」は、一家の生業を営むという意味の動詞。生業を意味する「なりわい」という名詞は、今も時々使われている。急に防人として召集されたので、出発さわぎにまぎれて、農作業をする上で大事な注意を、あれこれと妻に言い置いてくることもせずに出てきてしまったよ、という嘆きの歌である。

〔大意〕 省略。

今日よりは顧みなくて大君の醜の御楯と出て立つわれは
（下野・今奉部与曾布）

「醜の」は「みにくい・粗末な」という意味で、天皇に対して自分の身をへりくだって、こんな言葉を用いている。「楯」は敵の矢や刀を防ぐ武器。この一首は、さきの太平洋戦争中には、全国津々浦々の学校で教えられたので、戦時の体験を持つ人には、忘れようとしても忘れることのできない歌である。全体からみればごく少数だが、こうした勇ましい歌の存在も無視できない。

〔大意〕 防人として出征する今日からは、わが身や家族のことをふり返ったりせず、天皇の粗末な御楯、一兵士として、家を出て行く。私は。

唐衣裾に取りつき泣く子らを置きてぞ来ぬや母なしにして
（信濃・他田大島）

唐衣は中国ふうの着物で、ふつうは「からごろも」。単に「着る」「裾」などの語の枕詞としても使われる。

〔大意〕 防人として出て行く私の裾に取りすがって泣く子供たちを、置いて来てしまったよ、母親なしに。

防人に行くは誰が背と問ふ人を見るが羨しさ物思もせず
（作者不明）

これは、防人の妻、あるいは恋人の歌。

〔大意〕 防人に行くのはだれの夫（恋人）かしら、などと、気楽にうわさ話をする女たちを見るとうらやましい。私の夫（恋人）が防人として、出発しようとしているのに。

【歴史的仮名づかい】

問一 次の歌をすらすら読めるかな。

- (1) ひさかたの ひかりのどけき はるのひに
しづこころなく はなのちるらむ
□(2) わすれじの ゆくすゑまでは かたければ
けふをかぎりの いのちもがな
□(3) あまつかぜ くものかよひぢ ふきとぢよ
をとめのすがた しばしとどめむ
□(4) あさぢふの をののしのはら しのぶれど
あまりてなどか ひとのこひしき
□(5) こひすてふ わがなはまだき たちにつり
ひとしれずこそ おもひそめしか

古文には、歴史的仮名づかいが用いられています。この歴史的仮名づかいは、はるか昔から昭和二十年の第二次世界大戦が終わるまで、長い間用いられてきました。現在、わたしたちが使用しているのは、現代仮名づかいと呼ばれるものです。歴史的仮名づかいと比べると、わたしたちにとっては、現代仮名づかいのほうがなじみ深く、はるかに便利に感じます。でも、現代仮名づかいは、まだ使われ始めてからわずかに五十年前後。一方の歴史的仮名づかいは、数百年にわたる日本語の文字の書き表し方としての歴史をもっています。

日本人として、自分の国の言葉をよく理解するうえで、歴史的仮名づかに慣れ、古文に親しめるようになりましょう。

発音の原則

- (1) 「ゐ」↓「イ」
「ゑ」↓「エ」
「を」↓「オ」
(2) 「は・ひ・ふ・へ・ほ」(語頭以外)
↓「ワ・イ・ウ・エ・オ」
(3) 「ぢ」↓「ジ」「ズ」
「くわ」↓「ぐわ」↓「カ」「ガ」
(4) 「語尾などの「む」↓「ン」」
(5) 「ア段」+「う・ふ」↓「オ段」の長音
↓「かう」↓「コー」
(6) 「イ段」+「う・ふ」↓「ユー」
↓「きう」↓「キュー」
(7) 「エ段」+「う・ふ」↓「ヨー」
↓「けふ」↓「キョー」

問二 次の言葉をすらすら読めるかな？

- (1) ゐなか
□(2) こゑ
□(3) をとこ
□(4) おはす
□(5) かひこ
□(6) とふ
□(7) いへ
□(8) かほ
□(9) はぢ
□(10) みづ
□(11) くわじ
□(12) ぐわらり
□(13) あふぎ
□(14) うつくしう
□(15) けふ



【意味】

問三 次の古文の現代語訳としてふさわしいものを、あとのア～カから一つずつ選んでみよう。

- (1) 腹あしき人なりけり。 ()
□(2) 腹あしき人なり。 ()
□(3) 腹あしき人にあらず。 ()
□(4) 腹あしき人にやあらむ。 ()
□(5) 腹あしき人にてありけむ。 ()
□(6) 腹あしき人ならずや。 ()
ア 怒りっぽい人であらうか。
イ 怒りっぽい人ではない。
ウ 怒りっぽい人であつたのだろう。
エ 怒りっぽい人でないことがあろうか。いや、ない。(まさに、怒りっぽい人だ。)
オ 怒りっぽい人であつた。
カ 怒りっぽい人である。

古文を読んでいていちばん困ってしまうのは、文末の表現(助動詞や助詞)です。文末の助詞や助動詞の意味がわからないために文全体の意味もわからない、などということがあります。よく使われる言葉については、覚えておくようにしましょう。

よく用いられる文末表現

- (1) 「き」「けり」「した」(過去)
(2) 「なり」「だ」(断定)
(3) 「ず」「ない」(打ち消し)
(4) 「む・らむ」「だらう」(推量)
(5) 「けむ」「ったのだらう」(過去推量)
(6) 「ずや」「でないことはない、いやまさにそうだ」(反語)

ほかにも古文の中には、「現代では用いられなくなっている語」や「現代語と意味や使われ方の異なる語」、古文独特の「敬語」などがあります。そうした語についての知識があやふやだと、古文の意味を理解することができません。これらの基本的な古語については、きちんと覚えておくのがよいでしょう。

問四 次の古語の意味について、古語辞典などでチェックしておきましょう。

現代では用いられなくなっている語

- (1) いと □(4) さらなり
□(2) いみじ □(5) つきづきし
□(3) げに □(6) つれづれ

現代語と意味や使われ方の異なる語

- (1) あした □(7) すさまじ
□(2) あはれ □(8) つとめて
□(3) あやし □(9) にほふ
□(4) うつくし □(10) めでたし
□(5) おどろく □(11) やがて
□(6) かなし □(12) をかし

敬語

- (1) おはす □(4) さぶらふ
□(2) おぼゆ □(5) たまふ
□(3) きこゆ □(6) はべり

漢文基礎知識

年 組 氏名

漢文は、漢字だけで書かれた文章です。

漢文はもともとと中国で作られたものです。したがって、中国語の語順で書かれています。

漢文をわたしたちが読むときは、主に次の三つのうちのいずれかの文体を用います。

(1) 白文：漢文だけが並んでいる文。

春 眠 不 覚 曉。

(2) 訓読文：白文に仮名や符号をつけて、日本語の語順で読めるようにした文。

春 眠 不 覚 曉。

(3) 書き下し文：平仮名交じりで読み下した文。ふつうの日本語のような文。

春眠曉を覚えず。

* 訓読文が読めるようになろう

送り仮名

助詞・助動詞・用言の活用語尾などを片仮名で漢字の右下に示したもの。

不 入 虎 穴 不 得 虎 子。

返り点

日本語の語順に従って読むときの符号で、下から上に返って読むので、返り点という。漢字の左下につける。例えば「レ点」「一・二点」などがある。

(1) レ (レ点)

下の字からすぐ上の一字に返って読むことを示す符号。

読 書 登 山。

傍 若 無人。

人 不 学 不 知 道。

(2) 一 二 三 (一・二点)

二字以上離れた上の字に返って読むときに用いる符号。

帰 故 郷。

以 五 十 步 笑 百 步。

天 帝 使 我 長 百 獸。

さらに構造の複雑な文には「上下点(上・中・下)」や「甲乙丙点」「天地人点」などを用いる。
また、一・二点や上中下点などとレ点とが合わさったㄱのような符号もある。

* 特別な読み方の文字

(1) 置き字

訓読するときに読まない字のこと

学 而 時 習 之。

この「而」は、置き字である。ここでは接続のはたらき(「そして」の意味)をもっているが、「学んで」の「で」にその意味が表れているので、「而」という字自体は読まない。

(2) 返読文字

訓読するときに必ず下から返って読む字のこと。

非 人 也。

返読文字にはほかに

「不(ず・ざル)」

「無(なシ・なカレ)」

「難(かたシ)」

などがある。

中学生マリの素朴な疑問の巻

♡ 漢文って、どうして読む順に上から書いてくれないのかしら。読むとき、上にいたり下にいたりすつこくめんどくさいんだけど。

♡ 「うーん、なるほど。それならこういうのはどうかな。『I LOVE YOU』訳してごらん。

♡ 「わたしは あなたを 愛している。」

♡ あれ、語順どおりだと「わたし 愛している あなた。」だけれど。

♡ えっ？ あ、ほんとだ。でも……。それじゃ日本語の文とはいえないんじゃないかしら。

♡ そうだろう？ そこでマリちゃん「あなたは「あなた」と「愛している」との語順を逆にしたんだね。さらに「わたし」の後ろに「は」を、「あなた」の後ろに「を」をおぎなつて、より適切な日本語の文を作ったわけだ。

♡ それはつまり、

I LOVE YOU.

♡ ということと同じなんだよ。

♡ あれ、漢文みたいになっちゃった。

♡ 漢文というのは、もともとと中国語なんだ。つまり中国語の語順で書かれている。英文が英語の語順で書かれているのと同じさ。でも、日本人は考えた。英語と違って漢文は、語順さえ日本式にすれば簡単に理解できるんじゃないかと。だって、日本人は漢字そのものの意味を知ってるからね。

♡ うん、そうね。

♡ そこで発明されたのが、返り点だ。返り点のとおり読むと、確かに上にいたり下にいたりする。でも、そのかわりに意味がわかるようになるんだ。

♡ つまり返り点は、漢文を日本語に訳するための記号ってこと？

♡ そのとおり。さらに送り仮名もつけて、漢文をより適切な日本語に訳すことに成功したわけさ。

♡ じゃあ、上にいたり下にいたりするのは、それなりの意味があるのね。

♡ もちろんさ。

♡ ふーん。ちよびつと納得。



漢詩基礎知識

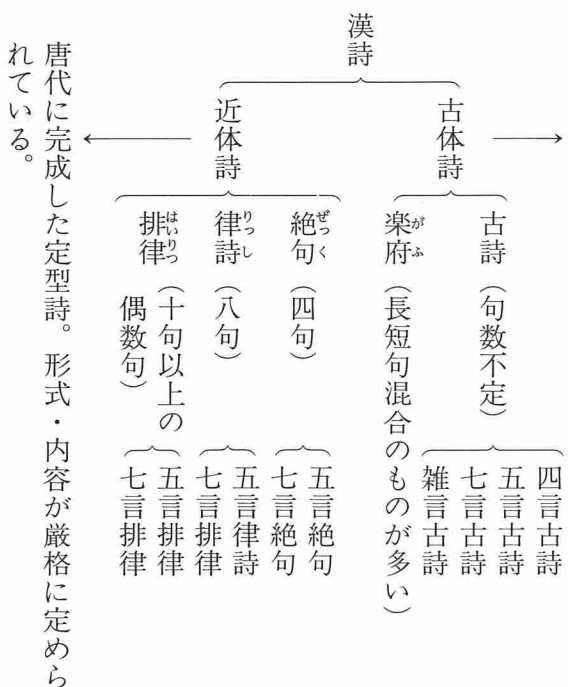
年 組 氏 名

漢詩とは、漢字だけで書かれた詩である。形式などによりいろいろなさまがある。

*形式

言：一行の字数
句：行数

唐代以前に成立した古い詩で、形式・内容がゆるやかである。



*押韻

韻とは、漢字のグループ分けのこと。漢字は全部で数万といわれるが、そのすべてが一〇六の韻のどれかに属している。どの字がどの韻に属しているかということはとても覚えられないが、おおむね音読みでわかる。例えば「金」という字と同じグループには「深」「心」などがあり、どれもin（イン）という音で終わっている。

この同じ韻の漢字を、詩の決められた場所に使うことを「韻を踏む」または「押韻」という。押韻すると詩にリズムを与えることができる。

五言の詩は偶数句の末字に、七言の詩は第一句と偶数句の末字に押韻するのが原則であるが、第一句に韻を踏まないこともある。

また、その詩の中で韻を踏んでいる文字を「韻字」という。

*起承転結

漢詩、特に絶句の組み立て方をいう。第一句（起句）で内容を起し、次の句（承句）で筋を展開させ、第三句（転句）で内容を転じて変化を与え、最後の句（結句）で全体をしめくくる。この書き方は、文章の書き方にも応用されている。

次の例は、江戸時代の漢学者・歴史学者である頼山陽が、この起承転結を説明するのに作ったといわれる。

京の五条の糸屋の娘（起）
姉は十七妹は十五（承）
諸国大名は弓矢で殺す（転）
糸屋の娘は目で殺す（結）

*五言絶句

静夜思 李白

牀前看月光（起句） 牀：ベッド

疑是地上霜（承句） 是：月光

举頭望山月（転句）

低头思故乡（結句）

*七言絶句

江南春 杜牧

千里鶯啼緑映紅（起）

水村山郭酒旗風（承）

南朝四百八十寺（転）

多少楼台煙雨中（結）

*五言律詩

登岳陽樓 杜甫

昔聞洞庭水（首連） 洞庭：洞庭湖のこと

今上岳陽樓（首連） 吳楚：吳と楚の二つの国

吳楚東南坼（首連） 東南：吳楚の地が中国の東南に当たり、そこに洞庭湖が切りさくようにある

乾坤日夜浮（首連） 乾坤：天と地

親朋無一字（首連） 親朋：親類と友人

老病有孤舟（首連） 無一字：一字の便りもない

戎馬關山北（首連） 戎馬：戦争

憑軒涕泗流（首連） 憑軒：手すりにもたれる

*唐代の有名詩人

漢詩は唐代（六一八〜九〇七）に入って隆盛となり、多くの有名な詩人が輩出した。中でも李白と杜甫はその双壁である。

(1) 初唐（六一八〜七一二）

駱賓王（六四〇？〜六八四）

(2) 盛唐（七一二〜七六六）

孟浩然（六八九〜七四〇）

王維（六九二〜七五九）

李白（七〇一〜七六二）

杜甫（七一二〜七七〇）

(3) 中唐（七六六〜八二四）

白居易（七七二〜八四六）

(4) 晚唐（八三七〜九〇七）

杜牧（八〇三〜八五二）

孔子
——名は丘、字は仲尼——

年 組 氏 名

山の神に授かった子（名前の由来）

孔子の父は叔梁紇（シユクリヨウコツ）といい、武将であつた。また、母親は顔徴在（ガンチョウザイ）といい、父の後妻であつた。

父親は先妻とのあいだに九人の子供がいたが、男は一人で、この長男は体が弱かつた。父親が後妻の顔をめとつたのは、だいふ年をとつてからだつたので、子供が生まれる望みはほとんどなかつた。そこで母親は、当時の慣習にしたがつて、郷里の有名な山、「尼山」にお祈りをして、子供を授かろうとした。そのかいあつて、孔子が生まれた。それで山に關係のある「丘」という名をつけたといわれる。また、次男には「仲」という文字をつけた習慣と、尼山にお祈りをして生まれた子供だからということとで字を「仲尼」とつけたといわれる。

孔子の子孫は一〇万人？

孔子の生まれたところは、魯の昌平郷の陬邑（そうやう）というところで、今の山東省曲阜（こうふ）にある。

生年月日は今の太陽暦（たいやうれき）になおすと、紀元前五二二年八月二十七日ということと、今でも誕生日をはさんで前後十日間は、毎年曲阜の町をあげて、盛大な生誕祭が開かれ、地元はもとより、ホンコン・マカオ・日本などから華僑や外人観光客などが集まってくるという。

また、現在も孔子の子孫がおり、「孔」という姓の人が一〇万人もいて、さかのぼればなんらかの形で孔家とつながっているという。

身長二メートル二〇センチ？

孔子は、生まれてすぐに父をなくし、母親も子供のころになくして、孤児（こじ）となつたとの伝説もあるほど、少年時代は苦難に満ちたものであつたらしい。しかし、彼はその境遇に負けず、種々の技能を身につけて独力で進路を切り開いていった。

貧困の中で育つた孔子は、武将の父親から人一倍強健な体をもらい受け、人から「長人」とよばれるほど背が高かつた。孔子の身長は九尺六寸といわれ、当時の中国人のなかでもきわだつて大きかつた。ほぼ一メートル九六センチから二メートル（一説には二メートル二〇センチ！）あつて、遠くからでもよく見えたという。

子 孔



三か月も感動し続けた音楽好き

子、齊（し）に在（あ）りて、韶（しやう）を聞くこと三月。肉の味を知らず。

（『述而篇』）

孔子の趣味は音楽であつた。本当に好きであつたらしく、齊（し）という国へ行つたとき、舜帝（しんてい）がつくつたという「韶」という音楽をきいたときは、その曲に感動して、三か月ものあいだ、肉の味がわからなくなつたということからわかる。

要するに、音楽は和を尊ぶものであるから、二つのものを合わせる力がある。とくに人の心を一つにまとめ、くれるところがあるのが好きな理由であつたらしい。

食べ物と弟子のエピソード

孔子は、お酒も好きだつた。飲めばいくらでも飲めたようであるが、乱れることはなかつたし、乱れるほどには飲まなかつたようだ。また、食べ物にはかなりやかましいほうで飯の味の変つたのは食べないし、切り目が正しくないものは食べなかつた。

孔子の弟子はたくさんいたが、その中に「子路」という人物がいた。

子路は、力が強く勇猛（ゆうもう）ではあるが、純朴（じゆんぱく）な性格であつた。初め子路は、儒者（じゆ）である孔子を「世をまどわすにせ賢者（けんしや）め、こらしめてやる」と、左手にニワトリ、右手にブタをひきさげて孔子のもとにやってくるが、孔子と会つて、その偉大（ゐだい）さに圧倒（あつぱう）され、即日（そくじつ）、忠実（しゅうじ）な弟子となる。

この子路は武芸（ぶげい）もほこりにしていたが、孔子と比べると武芸でも負けてしまふのにおどろき、そのうえ、孔子のあらゆる階層（かいそう）の人間の心を見通（みとお）するどきと、きわめて高く、汚（よ）れない理想主義（りやうしぎ）的な考え方に感心（かんしん）し、心底（しんてい）に孔子にほれこんでしまふ。彼は孔子の悪口（あくぐち）を言う者がいると、ものすごい形相（かたち）でおどしたので、孔子に弟子入りして一年ほどすると、孔子から「お前（まへ）が私のところに来（き）てから、私は悪口（あくぐち）を聞（き）かなくなつた。」といわれた。

この子路は、その後、人間的にも成長（せいしやう）して、孔子の晩年（ばんねん）には一人立ちして、衡（けい）という国を助けていたが、内乱（うちらん）のため殺（ころ）され、死体（してい）を塩（しほ）づけにされてしまつた。これを伝え聞いた孔子は、家中（じやうちゆう）の塩（しほ）づけ類（るい）をことごとく捨てさせ、それ以後（いご）、塩（しほ）づけ類（るい）は、いっさい食卓（しょくたく）にのぼらせなかつたという。

孔子の生涯（しやうがい）と思想（しゆきやう）

孔子は、自分の一生（いしやう）をふり返つて、まず、「吾（われ）十有五にして学（まな）ぶに志（こころ）す」と言（い）つてゐる。彼は村（むら）の教育組織（きやうくしき）（伝統・行事・軍事（きんじ）などの訓練（くんれん））を通じて行儀（ぎやうぎ）見習（みなづ）いを始めた。

孔子にはとくに先生（せんせい）（師（し））というものはいなかつた。彼は、自然（しぜん）や、交流（かうりゆう）するすべての人の長所（ちやうしよ）から様々なことを学（まな）んだので、考えようによつては、すべてが先生であつたといえよう。

「三十にして立つ」と言（い）つた孔子は、この年齢（ねんれい）で、独立（どくりつ）して学問（がくもん）の道（みち）を進（すす）む自信（じゆんしん）がついたと考えられる。

この時代（きだい）、すでに古代（こたい）の国家宗教（こくかしゆきう）は形式化（けいしきか）し、国民（こくみん）の信仰（しんぎやう）が失（うしな）われ、政治（せいざい）、社会的（しゃかい）的（てき）、道德（たうてき）的に無秩序（むちつじ）になつてゐた。そのため孔子は「礼（れい）」の權威（けんい）を復活（ふくたつ）させようと試（こ）み、過去の周代（しゆうたい）の諸王（しよわう）を理想（りやうきやう）人物（ぶつ）とした。

彼の思想（しゆきやう）の中心（しんしん）は「仁（に）」で、この「仁（に）」とは、一般（いぱん）には「公平（こうへい）に人を愛（あい）すること」とか「人間相互（にやうじんさうご）の愛情（あいじやう）」とかいわれているが、「仁（に）は人（ひと）なり」の言葉（ことば）から、「人間（にやうじん）すべての徳目（とくもく）の総称（そうしやう）」と考えてもよいといえよう。孔子は、その「仁（に）」を実践（じつけん）するために「学（がく）」すなわち読書（よみかき）し、教養（きやうやう）を高めることが大切（たいせつ）であり、「仁（に）」の実践（じつけん）は政治（せいざい）においてあるべきだと考えた。

孔子は、四〇歳（しじゆうさい）、五〇歳（ごじゆうさい）と年をとるにつれ、弟子（でし）も多くなり、名声（めいしやう）も得（え）て、魯国（ろこく）では宰相代理（さいしやうだいり）となつて、政治（せいざい）においても自分の考えを実践（じつけん）した。しかし、それも数年（すねん）間で、貴族（きぞく）と衝突（しうつう）、魯国（ろこく）を去（さ）り、以後（いご）一二年間（いちににねんかん）、諸国（しよこく）歴訪（れきほう）の旅（たび）に出（で）る。しかし、結局（けつぎゆ）、孔子（こうし）はどの国（こく）でも受け入れられず、六八歳（ろくはちさい）で祖国（こくこく）に帰（かへ）り、再び子弟（しよてい）の教育（きやういく）に力（ちから）を入れ、七二歳（しちにさい）で没（ぼつ）した。

李白

年組氏名

天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

この歌は阿部仲麻呂の歌である。仲麻呂は奈良時代の文学者。七十七年遣唐留学生として唐にわたり、唐朝に仕え、玄宗皇帝の下で役人となり、晁衡と名のり、重んじられた。その時李白と知り合った。仲麻呂は一度日本に帰国しようと船出したが、嵐にあって、安南（今のベトナム）に漂着した。しかし、李白はこの時、仲麻呂は死んだという知らせを受け、次のような詩を作った。

晁卿衡を哭す（卿は官名） 李白

日本の晁卿 帝都を辞し、
征帆一片 蓬壺を遶る
明月帰らず 碧海に沈み
白雲愁色 蒼梧に満つ

日本の晁卿のは、長安の都を去り、遠く旅立つ船に乗り、船の帆の小さなひとひらは、仙人の島のよな日本をめぐった。
清らかな月のような晁卿のは、青い海にしずんで帰らぬ人となった。白い雲が憂いをおびて、蒼梧（江南の海岸あたり）の海に広がっている。

このように日本人ともかわりのある李白とは、いったいどのような人物だったのであろうか。

李白は七〇一年、中国本土をはるかに離れた土地、スヤブ（今のキルギスタン共和国のトクマク）で生まれた。父は裕福な商人であった。李白が五歳の時、一家は蜀、現在の四川省綿陽県に移った。李白は子供のころから文学書に親しみ、十代から詩をつくった。十代後半になると、奔放で自由を愛する李白は、剣術を学び、仁侠の徒と交わったり、仙人世界にあこがれ、隠者や道士と交わったりした。

二五歳になった李白は、故郷の蜀をはなれ、旅に出た。

○黄鶴樓の伝説○

昔、長江のほとりに一軒の居酒屋があった。一人の道士がたびたび酒を飲みにきたが、酒屋のおやじは酒代をとらずいつもサーブスしていた。ある時、道士はお礼にといって、ミカンの皮でかべに黄色いつる（黄鶴）の絵を書き「これがおれだよ。客が来たら手をたたきなさい。このつるが舞い出て酒を運んでくるから。」と言って立ち去った。さつそく手をたたいてみると、黄色いつるが、かべからぬけ出てきて、舞いながら酒をいくらでも運んでくる。それからというもの、千客万来、居酒屋はみるみる大金もちになった。

十年ほどして、また道士が店にきた。そして、酒を飲んだあと、ふえを取り出してふくと、天からは白雲が飛来し、かべからは黄色いつるがぬけ出てきた。道士はそのつるの背に乗り、白雲とともにるか天上へと飛び去っていった。
後の世の人が、そのつるをしのんで、この地に黄鶴樓を建てたという。

早くに白帝城を發す 李白

朝に辞す 白帝 彩雲の間	早朝、朝焼け雲のたなびく白帝城に別れを告げて、
千里の江陵 一日にして還る	千里もはなれた江陵の地に、たった一日で帰っていく。
兩岸の猿声 啼いて	途中、兩岸の猿の鳴き声がたえまなく続くのを聞くうちに、
輕舟已に過ぐ 万重の山	小ぶねは、いく重にも重なった山々の間を通り過ぎていた。

そして、七二七年結婚、七二八年には隠者詩人孟浩然と知り合う。孟浩然是、李白より一二歳年上で、李白が最も親しく交わり、尊敬した人物の一人であった。それだけに、教科書にものっている有名な「黄鶴樓にて孟浩然の江陵に之くを送る」の詩には、いうにいわれぬさみしい思いが、「孤」「遠」「天際」などの言葉で表されている。

その後、李白は、大望である天子を補佐して天下を救うことも、文学をもつて後世に名を残すこともできず、不遇の年月を送った。しかし、七四二年、推挙する人があり、李白は、宮廷詩人として活躍する場を得た。それから足かけ三年、李白は絶頂期にあったが、彼の名声をねたむ者により中傷され、追放された。仲麻呂と知り合ったのは、この宮廷詩人時代であり、仲麻呂の海難を知ったのは、七五三年、追放後のことであつたので、仲麻呂が再び長安にもどり、唐朝に仕えたことは最後まで知らなかったらしい。

この後、李白は杜甫と出会って、一年ほどいっしょに行動したり、賊軍の徒として流刑にあうなどしながら、各地を遍歴し、七六二年十一月、六二歳でなくなった。



李白

李白は酒豪として知られ、伝説によるとよっぱらって、水中の月をとらえようとしておぼれ死んだといわれる。

そのためか、李白の詩の中には酒の詩が多く、有名な詩に「山中に幽人と対酌す」とか「客中に作る」などがある。また「春夜桃李の園に宴するの序」の名文もある。この文章の冒頭文は、芭蕉の「おくのほそ道」にも引用された「夫れ天地は万物の逆旅にして光陰は百代の過客なり」である。

また、彼の詩には数字がよく用いられ、比喻としても効果をあげている。例えば、

「白髮三千丈 愁に縁つてかくの似く長し」

「飛流直下三千尺 疑うらくは是れ 銀河の九天より落つるか」と
『盧山の瀑布を望む』

「三百六十日 日々酔うて泥の如し」
『内（妻のこと）に贈る』

などがある。

杜甫

年 組 氏 名

杜甫の五九年の生涯を五つに区分し、ながめることにしよう。

希望あふれる第一期（一歳～三五歳）

杜甫は七十二年、唐の玄宗皇帝即位の年に河南省鞏県の中流士族の家に生まれた。幼くして母と死別、叔母に育てられた。杜甫の若いころの詩は残っていないが、回想詩「壯遊」や「百憂集行」などで、若くして文学に親しみ、意気ごみも盛んであったことがわかる。

七歳思いは即ち壮んに口を開きて鳳皇を詠ず九齡 大字を書し作有りて一囊を成す……中略……

中歳旧郷より貢せらる氣は屈賈の壘を勵し目は曹劉の牆を短とす

（「壯遊」）

七三八年、二七歳で結婚。七四四年に杜甫は長安から追放され、山東に向かう途中、たまたま洛陽を通りかかった李白と、奇跡的な出会いをした。時に杜甫三三歳であった。このときから、杜甫は李白にかぎらない尊敬の念をいだくようになった。

動乱の中の第二期（三五歳～四八歳）

七四六年、三五歳で杜甫は長安に出る。翌年中央の特別試験をうけるも落第。生活にも困った。七五五年やつと官に任ぜられ、家族のいる奉先県へ行く。その時安祿山の乱が起こり、杜甫は兵乱をさけ、家族と別れ、一人新帝のもとに向かうが、途中、賊軍にとらえられ、長安に軟禁された。

この時有名な「春望」をつくる。やがて長安を脱出し、家族と奇跡的な再会をする。しかし、彼は政界をうまくわたっていき、年ばかりとっていく。その中で飢餓などの食糧問題・政界における見通しがかないことなどによって、政界に進出する夢をすてると同時に、社会派詩人といわれるような詩もつくり出すのであった。

車轆轤 馬蕭蕭
行人の弓箭 各々腰に在り
耶娘妻子 走って相送る

……

君見ずや 青海の頭
古来白骨 人の収むる無く

新鬼は煩冤し旧鬼は哭し
天陰り雨湿るとき
声啾啾たるを

（「兵車行」）

七歳のころに文学に思いを入れ、鳳皇という詩を作って口ずさみ、九歳の時には大きな字を書き、詩や文章でふくろがいっぱいになった。

二〇代半ばごろ、私は郷貢生として都へと送り出された。意気ごみは昔の文人、屈原や賈誼に戦いを挑まんばかりであり、詩人の曹植や劉楨をも眼下に見下すほどであった。

轆轤 車の走る音。ゴロゴロ。
蕭蕭 馬の鳴き声。ヒヒーン。
弓箭 弓矢。
行人 出世兵士。
耶娘 父母

青海 湖（湖）。
新鬼 死んだばかりの人の幽霊。
啾啾 亡霊の泣くうらめしげな声。

貧苦の中の第三期（四八歳～四九歳）

官をすて、華州をはなれた杜甫は、家族とともに親せきをたよって秦州（甘肅省天水県）へ向かった。しかし、ここでの生活は非常に貧しく、三か月ほどいて、同谷（甘肅省成県）に移ることになったが、ここでも旅ばかりで貧しい生活が続いた。そのころの詩に、「男子と生まれながら、名をあげることもできないうちに年をとってしまった。三年このかた、あれた山中の道を飢えにかられて走り回った。……富貴を得るには若い頃から努力するべきなのであらう。」（乾元中、同県に寓居して作れる歌）と、自らの身の上をなげき悲しむ内容のものがある。

安らぎの中の第四期（四九歳～五四歳）

七五九年一二月、一か月ほどいた同谷を去り、安住の地を求めて成都にきた。そこに小さな家（草堂と名づけた。）を得て、近隣の温かい援助と友人の往来に久々に一家は安らぎの日々を過ごす。

水流れて心は競わず、川の水の流れのままに心をまかせ、雲と同じに気持ちいをのんびりさせる。

（「江亭」）

だが、貧乏はついてまわった。「狂夫」という詩のなかで、「恒に飢うる稚子（子どもたちは）色（顔色は）凄涼（いたましい）」と、うたっている。

七六三年正月、安祿山の乱が収まり、杜甫は故郷に帰ろうとする。しかし、都は未だ不穩で帰るに帰れず、望郷の思いはつる。

絶句 杜甫

江碧にして 鳥逾白く 江の色は青色で、鳥は一層白く
山青くして 花燃えん 山は青緑で、花は燃えるように
と欲す 赤い。
今春 看すみす又過ぐ 今年の春も、またまたたくまに
何れの日か 是れ帰年 過ぎ去っていく。
ならん ああ、いったいいつになったら
帰れるのか。

異郷に没す 第五期（五四歳～五九歳）

七六五年、杜甫は安らぎの家（草堂）をはなれ、揚子江上流の岷江を下り、揚子江に入って、今の重慶、忠県、雲陽を下り、洞庭湖に至った。ここで有名な「岳陽楼に登る」をつくった。その最後の部分。

親朋 一字無く 今の私は知り合いから一字の便りもなく、
老病 孤舟有り 老いと、病む身にただ一その舟があるのみ。
戎馬 関山の北 戦乱は北の故郷では続いている。
軒に憑つて涕泗 楼の手すりによりかかって涙を落とす。
流る

杜甫は、死ぬ三年ほど前から、ぜん息、神経痛、糖尿病などをわずらっていた。帰郷の夢は果たせないまま、七六九年の冬、潭州から岳州へ向かう舟の中で没した。

孟浩然

年 組 氏名

中国の盛唐時代（七一〇～七六五年）に活躍した詩人孟浩然是、「春眠曉を覚えず」と歌った「春曉」という詩で有名である。孟浩然是自然派詩人として知られ、同じ自然派詩人の王維、韋應物、柳宗元とともに、「王孟韋柳」と称される。

李白の見た孟浩然

孟浩然に贈る

吾愛す 孟夫子

風流 天下に聞こゆ

紅顔 軒冕を棄て

白首 松雲に臥す

月に酔うて頻りに聖に中り

花に迷うて君に事えず

高山 安んぞ仰ぐべけんや

此より清芬を揖す

李白

私は孟先生が大好きだ。その風雅な人からは天下に知れわたっている。青年のころより官位につく望みをすて、白髪の老年まで、雲のかかる松の木かげで寝起きしておられる。月をながめ酒に酔い、花の美しさに心をうばわれて天子に仕えようとしない。このように世俗をこえた立派な人からは、高い山のよう、どうして仰ぎ見ることができよう。私はただここで、先生の清らかな姿を拝礼するばかりだ。

四〇歳にして長安の都に出、多くの有名詩人と交わった孟浩然是、この時期に李白と知り合っただけらしい。

一二歳年下の李白は、すぐれた詩才をもちながら、世間をはなれ、自然の中に深く入って生活を送る孟浩然の人がらにすっかり魅せられた。そのため、この詩も孟浩然をほめちぎっているが、はたして孟浩然という人は、一生を通して地位も名誉も望まない、世俗を超越した人物だったのだろうか。

公務員試験に何度も落ちた

孟浩然是六八九年、湖北省襄陽県の生まれ、名は浩、字は浩然。襄陽は安陸の西二〇〇キロにある景色の美しい農村地帯であり、今でもにわとりや犬の鳴く、のどかな土地であり、「春曉」の舞台ともいわれるところである。

孟浩然是、ここで育つうち、人並みに出世の望みをもつようになり、成人して「科挙」という公務員試験を何度か受けたが、その都度、失敗した。

※科挙……唐代に行われた公務員試験。「いろいろな科に分けて試験を行い人を挙用する」という意味。主要な科に明経と進士とがあり、明経は主に儒学の經典に関する知識を、進士は主に詩文の能力をみた。なかでも進士科は博学多才であることが要求され、試験は非常に難しかった。「三十老明経、五十少進士（三十で明経に合格するのは年寄りの部、五十で進士に合格するのはまだ若いほう）」ということわざが生まれたほどの難しい試験であった。

したがって、李白の詩のなかの、「紅顔、軒冕を棄て」ところは、必ずしもあたってはいない。
※軒冕＝貴人の用いる車とかんむり。転じて高位・高官をいう。

正直に述べたばかりに損をした

孟浩然是試験失敗後、各地を放浪した末に郷里の鹿門山という山に世をさけて住んでいた。そして、自然の中で、自然を見つめる目を養いつちかかってきた彼は、四〇歳で長安に出るまでに、自然詩人として世にその名を知られるようになっていた。そのため、都に出ると、有名な詩人、張九齡や王維にその才能を知られるところとなり、李白らとも交わった。

彼は都に出てからも官職につこうと努力した。

ある日、友人の王維を宮中の役所に訪ねたとき、たまたま玄宗皇帝が来あわせ、孟浩然是は拝謁を許され、詩を作るチャンスを得た。

彼はこのとき、喜び勇んだため、あまりにも正直に、しかし、謙虚に、「不才、明主に棄てられ、多病、故人に疎まれる」（「歳暮帰南山」）と歌った。しかし、その詩は、「棄てられた」とは無礼である。」と玄宗皇帝のいかりにふれた。謙そんした表現のうちにこもる不平不満を見ぬかれ、せっかくのチャンスを自ら棒にふった。

晩年まで仕官しなかった

孟浩然是晩年五〇歳近くになって、「洞庭に臨む」という詩を作っているが、それには、官吏として荊州（江陵）に来ていた張九齡に対して、仕官を望むナゾがかけられていた。

それは、詩の一節「済らんと欲するに、舟楫なし」の部分で、直訳は「洞庭湖を渡ろうとしているが、舟もかじもない」であるが、じつは「役人になって世わたりがしたいのであるが、コネ（縁故）がない。」というなげきをもらしたものである。ちなみに、この詩のおかげで、孟浩然是張九齡の下で、補佐役として仕官することができた。

こうしてみると、孟浩然是、晩年まで官位にこだわったのであるから、李白のいうほどに、世間を超越していた人物ではなかったようだ。

自然詩人として

有名な唐代詩人の中でも、自然詩人としては、王維と並び称される孟浩然是であるが、彼が、自然に深く交わり、長い間、世の中からはなれてくらししたのは、そのきまやかな性格と、自分の才能が社会の中に受け入れられなかったことへの不満の現れではなかったかとの説もある。確かに、四〇歳を過ぎて仕官にあくせくしているところをみると考えられることではある。

しかし、彼の行動がどうあれ、孟浩然是が、唐代詩人中でもきわだった存在であることは確かであり、その作品が、自然を歌い、すがすがしく、美しく、しかも親しみに満ちた内容であることに変わりはない。李白より一歳年下の杜甫もまた孟浩然是を尊敬した一人であった。彼は「解悶（うさばらし）」一二首のその六で、

復た憶う 襄陽の孟浩然

清詩句句 ことごとく伝う
るに堪えたり

また襄陽の孟浩然のことを思い出した。
その清らかな詩の一句一句は、みな伝えられて当然のすばらしさだ。

と歌い、やはり彼の詩のすばらしさをほめたたえている。

読書記録をひかめろ

年 組 氏名

自分が読んだ本の記録をつけて、読書の足跡として、残しておきましょう。
読む本の中には、つまらなくなって途中でやめた本や、思ったより内容が難しくてよくわからなかった本もあるでしょう。そういう読書についてまで、感想をまとめなければならぬというわけではありません。しかし、読書の足跡としては、残しておきたいものです。読書は自分の成長の記録です。

No.	読み終えた 年 月 日	書 名	編 著 者 (訳者)	出 版 社 名 (文庫)	感銘度	ひ と こ と 感 想	入 手 方 法
1							学・図・借・購 他 ()
2							学・図・借・購 他 ()
3							学・図・借・購 他 ()
4							学・図・借・購 他 ()
5							学・図・借・購 他 ()
6							学・図・借・購 他 ()
7							学・図・借・購 他 ()
8							学・図・借・購 他 ()
9							学・図・借・購 他 ()
10							学・図・借・購 他 ()
11							学・図・借・購 他 ()
12							学・図・借・購 他 ()
13							学・図・借・購 他 ()
14							学・図・借・購 他 ()
15							学・図・借・購 他 ()

⑨「感銘度」の欄には、◎ たいへんよかった ○ よかった △ 普通
× つまらなかった の印を書き入れなさい。

⑩「入手方法」欄は、学 (学校図書館)、図 (公共図書館)、借 (個人的に借りた)、
購 (買った)のどれかを○でかこむ。あてはまらないものは他 () に記入。

<書き方の例>

No.	読み終えた 年 月 日	書 名	編著者 (訳者)	出版社名 (文庫)	感銘度	ひ と こ と 感 想	入手方法
1	7.12.15	不思議の国のアリス	ルイス・キャロル (福島正実)	角 川	◎	英語でのゴロ合わせがとても数学の先生らしかった。	学・図・借・購 他 ()
2	8.1.8	クレヨンしんちゃん2	臼井義人	双 葉	○	色々ないたずらが楽しいけど、ハラハラした。	学・図・借・購 他 ()
3	8.1.21	そして誰もいなくなった	アガサ・クリスティ (清水俊二)	早 川	○	ずっと犯人と思っていた人が犯人じゃなかった。	学・図・借・購 他 (兄のもの)
4	8.2.18	あさきゆめみし3	大和和紀	講 談	○	すごく源氏が素敵で、早くつづきが読みたい。	学・図・借・購 他 ()
5	8.3.3	次 郎 物 語	下村湖八	新 潮	◎	長くて疲れたけど次郎が偉いと思った。	学・図・借・購 他 (もらった)

芥川龍之介

年 組 氏 名



龍之介の文学 芥川龍之介は、大正時代に活躍した作家で、日本近代文学史上最も優れた短編小説家である。彼は、すでに東大在学中に『羅生門』を発表して注目され、ついで『鼻』を発表して漱石の激賞を受け、はなばなしく文学界に登場した。初期の作品には、『宇治拾遺物語』や『今昔物語集』など、主として古典に題材をとり、古典を舞台にしたものが多い。その後、写実的な『秋』を転機とし、自伝風な作品も発表していくが、晩年には、とぎすまされた繊細な神経と強烈な自我意識とから、厭世的な人生観を文学的に定着させながらも心身ともに傷つき、『将来に対する漠然とした不安』（遺書）を抱いて自らの命を絶った。

略年譜

年号（西暦）	歳	事 項
明治25（一八九三）	0	東京市京橋区（現東京都中央区）で誕生。辰年辰月辰日辰刻に生まれたのにちなんで龍之介と命名される。
31（一八九六）	6	江東尋常小学校に入学。
35（一九〇三）	10	母フク死去。
38（一九〇五）	13	東京府立第三中学校（現都立両国高校）に入学。
43（一九一〇）	18	成績優秀のため無試験で第一高等学校第一部乙類に入学。同級生に菊池寛・久米正雄・山本有三らがいた。
大正2（一九一三）	21	東京帝国大学（現東京大学）英文科に入学。「羅生門」を発表。漱石の「木曜会」に出席し、漱石門下となる。
4（一九一五）	23	塚本文と結婚。
7（一九一八）	26	海軍機関学校をやめ、大阪毎日新聞社の社員となる。
8（一九一九）	27	大阪毎日新聞社の海外視察官として中国に特派される。
10（一九二二）	29	このころより、神経衰弱がこうじて不眠症に陥る。
昭和元（一九二六）	34	七月二十四日、睡眠薬を飲んで自殺、死去。
2（一九二七）	35	

主な作品の紹介

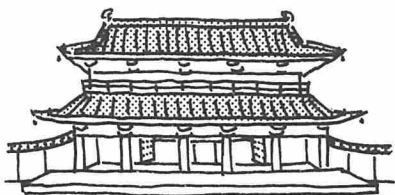
羅生門

短編小説。龍之介の処女作で、「今昔物語集」に題材をとり、人間のエゴイズムをえぐり出し、人間存在の弱さを具象化し、短編作家としての資質と可能性を見せた作品である。

〔あらすじ〕 晩秋のある暮れがた、主人から暇を出され途方にくれる下人が、荒廃した羅生門の下で雨やみを待っていた。彼は、門の楼の上に上り、女の死体の髪を抜く老婆を見てねじふせ、その老婆から、生きるために悪をはたらくことを正当化する言葉を聞く。下人の心に悪を肯定する勇気がわき、おれもそうしなければ餓死する身なのだと言い、老婆の衣服をはぎ取って、黒洞々たる夜の中に駆け去る。

〔書き出し〕 ある日の暮れ方のことである。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。

広い門の下には、この男のほか誰にもいない。ただ、ところどころ丹塗りの剥げた、大きな円柱に、蟋蟀が一匹とまっている。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男のほかにも、雨やみをする市女笠や揉烏帽子が、もう二、三人はありそうなものである。それが、この男のほかには誰もいない。



鼻 短編小説。漱石に推賞された出世作。「傍觀者の利己主義」の心理と自尊心のおろかさ、を、「今昔物語集」「宇治拾遺物語」から材をとって描きだした作品。

〔あらすじ〕 高僧禅智内供は異様に長い鼻をもっていた。彼の苦痛は食事の不便よりも、それによって傷つけられる自尊心にあった。鼻を短くする方法に腐心しているうちにある弟子が秘法を聞きこんできて治療し、悪意さえ感じられた。しかしある夜、鼻はふいふいのように長くなった。内供の心にははれとした心もちがかえってくるのであった。

〔部分〕 ところが二、三日たつうちに、内供は意外な事実を発見した。それは折から、用事があって、池の尾の寺を訪れた時、前よりもいっそう可笑しそうな顔をして、話も碌々せず、に、じろじろ内供の鼻ばかり眺めていたことである。そののみならず、かつて、内供の鼻を粥の中へ落としたことのある中童子などは、講堂の外で内供と行きちがつた時に、始めは、下を向いて可笑しさをこらえていたが、とうとうこらえ兼ねたとみえて、一度にふつと吹きだしてしまった。用をいいつかつた下法師たちが、面と向かっている間だけは、慎んで聞いていても、内供が後ろさえ向けば、すぐにくすくす笑いだしたのは、一度や二度のことではない。

芋粥

短編小説。欲望は満たされぬ幻滅感が残るのみだ、という作者の人生観を主題とした作品である。

〔あらすじ〕 平安朝のころ、風采のあがらない五位の侍がいた。この男の唯一の願いは、芋粥をあきるほど食べてみたいということであった。そして、意外に早くその目的は達せられ、欲望は満たされた。が、同時に彼の内には、かつての芋粥に強い欲望を抱いていたころをなつかしむ気持ちがいっていた。

地獄変

短編小説。人間性を放棄することによって芸術美の完成を得るという、作者自身の芸術至上主義を語る作品。

〔あらすじ〕 堀川の大殿に庇護されている絵仏師良秀は、醜く高慢な男であったが、異常なほどの画才をもっていた。大殿に地獄変の屏風絵を命ぜられ、身分の高い女性が燃えさかる牛車の中でもだえ苦しむ姿を目の前で見せてほしいと願い出る。その夜猛火につつまれた車に縛られていたのは、良秀の愛娘であった。良秀は、さながら恍惚とした法悦の輝きにつつまれ筆を走らせていた。みごとに屏風を完成した次の夜、良秀は自殺する。

夏目漱石

年 組 氏 名



漱石の文学

千円札で有名な夏目漱石は、森鷗外とともに、明治・大正時代に活躍した日本近代文学史上不滅の大家です。漱石は学者として出発し、初めは主としてイギリス文学を研究していましたが、東大在学中に正岡子規を知ってその影響を受けました。漱石の最初の小説『吾輩は猫である』は、その子規の門下生である高浜虚子が主催する俳誌「ホトトギス」に掲載されて評判になりました。以後、漱石は、名作『坊っちゃん』『草枕』などで小説家としての地位を確立しました。鋭い風刺、ユーモアあふれる書きぶり、反俗精神に満ちた作風で人気を博した漱石は、後年、東洋的な潔癖な道義観と西洋的文学から学んだ高度な近代的知性との間に支えられて、『こころ』などの作品にみられる、人間存在の底に潜むエゴイズムの追求といった問題に取り組んでいきます。その作品がもつ近代的なテーマは、門下生をはじめ多くの後輩に引き継がれていきました。

略年譜

年号(西暦)	歳	事 柄
慶応3 (一八六七)	0	江戸牛込馬場下横町(現東京都新宿区)で誕生。本名金之助。
明治元 (一八六八)	1	塩原家の養子となる。
11 (一八七八)	11	東京府立一中に入学。
14 (一八八二)	14	二松学舎(現二松学舎大学)で漢籍を学ぶ。
21 (一八八八)	21	第一高等中学本科入学。夏目家に復籍。
22 (一八九〇)	22	正岡子規を知る。「漱石」という筆名を初めて使う。
23 (一九〇〇)	23	帝国大学文科大学(現東京大学)英文科に入学。
26 (一九〇三)	26	文科大学卒業。大学院入学。東京高等師範(東京教育大学、今の筑波大学)講師となる。
28 (一九〇五)	28	四国松山中学に赴任。
29 (一九〇六)	29	熊本第五高等学校に赴任。中根鏡子と結婚。
33 (一九〇〇)	33	英国に留学。
36 (一九〇三)	36	帰国。第一高等学校と東大英文科との講師になる。
40 (一九〇七)	40	教職を退き、朝日新聞社に入社。胃腸病おこる。
43 (一九一〇)	43	胃潰瘍のため入院・手術。療養先の修善寺で吐血、危篤状態となる。
44 (一九一一)	44	文学博士辞退。
3 (一九〇四)	46	神経症・胃潰瘍再発。
4 (一九〇五)	47	胃潰瘍悪化。
5 (一九〇六)	48	十二月九日、胃腸病悪化し、死去。

主な作品の紹介

中編小説。「ホトトギス」に発表。一人称(おれ)で書かれた文体と、その話の

坊っちゃん

おもしろさの中に清新な反俗精神のこもる作品。

〔あらすじ〕

単純で率直な、江戸っ子のおれ(坊っちゃん)は、物理学校を卒業し、四国の中学校の数学教師になる。おれの奔放な言動は、生徒や同僚の教師たちの間にいろいろな事件をまき起こし、またまきこまれる。周囲の愚劣・無気力・悪知恵におれは反発し、先輩教師の山嵐とともに、悪玉の教頭赤シャツらに鉄拳制裁を加え、教職をなげうって東京に帰る。

〔書き出し〕

親譲りの無鉄砲で子供のときから損ばかりしている。小学校にいる時分学校の二階から飛び降りて一週間ほど腰を抜かしたことがある。なぜそんな無闇をしたと聞く人があるかもしれぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出していたら、同級生の一人が冗談に、いくら威張っても、そこから飛び降りることはできない。弱虫やーい。と嘲したからである。

吾輩は猫である 長編小説。雑誌「ホトトギス」に連載。漱石の処女作で、「吾輩」である猫が人間社会を批評するという新奇な形式と、全体にあふれるユーモアや風刺が世に迎えられた出世作。

〔あらすじ〕 生まれてまもなく捨てられた「吾輩」は苦沙弥先生の家に住みこむ。人間は不徳なものだと車屋の黒から教えられた吾輩は人間を観察する。主人の門下生寒月、美学者迷亭、詩人東風などは主人宅にやってきては太平楽を並べて語り、いろいろの人間模様が織りなされる。最後に、吾輩は水がめに落ち、南無阿彌陀仏を唱えて死ぬ。

〔書き出し〕 吾輩は猫である。名前はまだない。どこで生まれたかとんと見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめとした所でニャーニャー泣いていたことだけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間の中で一番寧ろ悪な種族であったそうだ。この書生というのは、時々我々を捕まえて煮て食うという話である。しかしその当時は何という考えもなかったから別段恐ろしいとも思わなかった。ただ彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあつたばかりである。

三四郎 中編小説。「朝日新聞」に連載。純真な学生

三四郎

の不安や動揺、孤独、前途への漠とした夢を、故郷と学問と恋愛の三つの世界に表す。また、新しい女性像を描いて、後の現実的な小説への道を開いた作品でもある。

〔あらすじ〕

熊本の高校を出て大学へ入るために上京した小川三四郎にとって、見るもの聞くものすべてが驚きの種であった。彼のまわりには同郷の先輩野宮、友人佐々木、「偉大なる暗闇」広田先生、里見美弥子らが現れる。三四郎は美弥子に心ひかれるが、彼女は女性なのを感じさせたまま、常識的な結婚をする。

こころ

中編小説。「朝日新聞」に連載。上「先生と私」、中「両親と私」、下「先生と遺書」の三編からなる。「死」に至る人間の心の過程」を主題とし、「エゴイズムと罪」の問題を提起する。

〔あらすじ〕

大学を卒業して帰省した私のもとに、先生から遺書が届く。先生は学生時代、未亡人と美しいお嬢さんのいる下宿に、困窮していた親友のKを同居させた。Kからお嬢さんへの恋をうち明けられて驚き、Kをだし抜いて奥さんからお嬢さんとの結婚の許しを得る。それを知ったKは自殺する。結婚した先生はKの幻影に苦しみ、罪の意識から孤独感がつのり、Kの心を深く理解して自殺を決意する。

森 鷗外

年 組 氏 名



鷗外の文学

森鷗外は漱石と並んで明治・大正時代に独自の態度を保ちつつ数多くの名作を生んだ大作家です。医者を志していましたが、同時に、訳詩集『於母影』、雑誌「しがらみ草紙」を出すなど文学活動も行っていました。最初の小説『舞姫』、続いて『うたかたの記』『文づかい』と、ドイツ留学時代の成果を問うた三部作を発表して文学界に地位を確立しました。初期のころは、翻訳・評論などで明治の文学界に大きな影響を与えましたが、大正期以降は、『阿部一族』など、主として歴史に取材した小説を発表、武士社会に生きる人間の「意地」を描き、そこにある倫理的問題を追及して独自の解釈を加えました。また、安楽死の問題を提起した『高瀬舟』などの歴史小説は、後のテーマ小説のさきがけともなりました。総じて鷗外の文学は、東西文化に対する高い知性・教養を基盤に、現実的な精神と理想主義的な精神の調和の上に成り立っている、スケールの大きさを感じさせるものとなっています。

〈略年譜〉

年号（西暦）	歳	事 柄
文久2（一八六二）	0	岩見国鹿足郡津和野町（現島根県津和野町）で誕生。本名林太郎。
明治5（一八七二）	10	父と上京。ドイツ語を学ぶ。
7（一八七四）	12	年齢をいつわり第一大学区医学校（現東京大学医学部）予科に入學。
14（一八八二）	19	東京大学医学部卒業。陸軍軍医副として陸軍病院に勤める。
17（一八八四）	22	ドイツ留学。ミュンヘン大学、ベルリン大学で学ぶ。
21（一八八八）	26	イギリス・フランスを経て帰国。陸軍軍医舎の教官に就任。
22（一八九〇）	27	赤松登志子と結婚。
23（一八九〇）	28	妻と離婚。
24（一八九一）	29	坪内逍遙と「没理想論争」。
25（一八九三）	30	文京区本郷千駄木に転居。家を「観潮楼」と名づける。
27（一八九四）	32	日清戦争に軍医として従軍。
32（一八九九）	37	九州小倉に転居。
35（一九〇三）	40	帰京。荒木志げと結婚。
37（一九〇四）	40	日露戦争に軍医として従軍。
40（一九〇七）	43	陸軍軍医総監・陸軍省医務局長に就任。
43（一九一〇）	46	慶応義塾文学科顧問に就任。
45（一九一二）	48	明治天皇崩御。乃木大将夫妻殉死。
大正5（一九一六）	54	陸軍退官。
8（一九一九）	57	帝国美術院院長になる。
11（一九二二）	60	七月九日、肺結核のため死去。

〈主な作品の紹介〉

舞姫

短編小説。清新な異国情緒と典雅な和文体で読者を魅了した作品。

〔あらすじ〕 ドイツに派遣された秀才太田豊太郎は、自由な空気にふれて真の自我に目ざめる。踊り子エリスの経済的危機を救い親密になり、それがもとで免職になってしまふ。孤独になった豊太郎はエリスと同棲するが、親友相沢謙吉の友情により再び出世コースに乗り、エリスと別れてしまふ。狂乱するエリスを捨てて帰国する豊太郎の胸中には複雑なものがあつた。

阿部一族

短編小説。封建社会の「殉死」をめぐる武家気質の「意地」を扱った歴史小説。

〔あらすじ〕 肥後藩主細川忠利の死に際し、阿部弥一右衛門は殉死者の中に加えられず生き残り、周囲の非難を受けて無念腹を切る。嫡子権兵衛は、侮辱を受け禄高をへらされ、忠利の一周忌に武士をすてる行動に出て縛り首となった。阿部一族は権兵衛の屋敷にたてこもり討手を引き受けて滅亡する。

山椒太夫

短編小説。山椒太夫伝説を現代風に改め、作者の創作を加えた歴史小説。犠牲となる覚悟を決めた人間に表れる不思議な力を描いている。

〔あらすじ〕 一〇八〇年ごろ、筑紫に流された父を訪ねて、安寿と厨子王は母とともに岩代の国から旅に出た。三人は直江津で人買いにだまされ、母は佐渡へ、姉弟は丹後の由良の山椒太夫に売られる。そこで酷使されていたが、安寿は入水自殺して自ら犠牲となり、弟を都へ脱出させる。厨子王は都で正道と名のり、後に丹後の国主となり、人の売買を禁じ、佐渡で盲目の母とめぐり会う。

〔本文〕 あくる朝、二人の子供は背に籠を負い腰に鎌を挿して、手を引き合つて木戸を出た。山椒太夫の所に來てから、二人一しよに歩くのはこれが初めてである。厨子王は姉の心を付り兼ねて、寂しいような、悲しいような思いに胸が一ぱいになっている。きのうも奴頭の帰ったあとで、いろいろに詞を設けて尋ねたが、姉はひとり何事かを考えているらしく、それをあからさまには打ち明けずにしまった。

山の麓に來た時、厨子王はこらえ兼ねて言った。「姉さん。わたしはこうして久し振りで一しよに歩くのだから、嬉しがらなくてはならないのですが、どうも悲しくてなりません。わたしはこうして手を引いていながら、あなたの方へ向いて、その禿になつたお頭を見るのが出来ません。姉さん。あなたはわたしに隠して、何か考えていますね。なぜそれをわたしに言うて聞かせてくれないのです。」

高瀬舟

短編小説。「安楽死」の問題を提起する。後の「テーマ小説」の先駆をなす作品。

〔あらすじ〕 弟殺しの罪で高瀬舟に乘せられた喜助は、はればれとしてゐる。不思議に思つてその心持ちを問う護送の同心羽田庄兵衛に、喜助は島に送つて食べさせてくれる上に二〇〇文をもらつてありがたいと言う。弟殺しというのは、自殺を図つて死にきれず苦しんでいる弟を助けて死なせてやつたということであつた。

〔書き出し〕 高瀬舟は京都の高瀬川を上下する小舟である。徳川時代に京都の罪人が遠島を申し渡されると、本人の親類が牢屋敷へ呼び出されて、そこで暇乞いをすることを許された。それから罪人は高瀬舟に乘せられて、大阪へ廻されるのであつた。それを護送するのは、京都町奉行の配下にいる同心で、この同心は罪人の親類の中で、主立った一人を大阪まで同船させることを許す慣例であつた。これは上へ通つたことではないが、いわゆる大目に見るのであつた。黙許であつた。